10 艶

石原純著

ARS

歌集霧日

石原純著

ARS

歌集霧愛　日

石原純著

日霧

石原純著

アララギ叢書第十四篇

序

私が歌をつくり出してからはもう隨分年が經ちました。もと文學にも理學にも趣味をもつてゐた私は高等學校にはいる時にどの科を選んだらいゝかと云ふことに迷ひました。試驗の都合やその外の思惑から私はとうとう理科へはいつておのづから理論物理學の攻究へ向つてまゐりました。私はそこに自然に對する私たちの認識のなかに異常なる驚異を体感せずにはゐられませんでしたけれども、それと共に他方に向つては自然や人生に對する直觀のなかに見いだされる感激にも深く觸れることによりて人間としての私みづからを育てやうといたしました。歌をつくり出すやうになつたのもそれの一端

のあらはれに過ぎないと自分では思つてゐます。

丁度私の一高時代に「日本」新聞紙上にあらはれた正岡子規氏の「歌よみに與ふる書」や「人々に答ふ」などの歌論を讀んで私はそれを大層おもしろく感じました。そしてそのなかに引かれてあつた萬葉集や金槐集の歌に深く讃嘆したのでした。私はその前から當時最も盛であつた俳句などを見てはゐましたが、そしてそのなかには私の心を動かすものもありはしましたが、一体に短い客觀句だけではどこか物足りなさを感じてゐたので、萬葉集の多くの歌が切實なる響をもつて私たちに迫るのを見て、悠ちにその方に心を惹かれずにはゐなかつたのでした。明治三十五年の春になつて鈴木蕗房主人の選のもとにいろ〳〵な募集歌が全新聞紙上にあらはれたのを私は興味ふかく讀みながら、自分でも始めて歌作を試みるやうになりました。

全年の秋、正岡先生が逝くなられて私は永久にお目にかゝる機會を

失つたことを憾みましたが、間もなく根岸短歌會同人によりて雜誌「馬酔木」の生れたことをうれしく思ひ、それを熱心に讀んでは歌をつくりました。翌年になつてから始めてその同人の中心になつてゐた伊藤左千夫氏を本所の寓にたづね、それから明治四十四年に私が仙臺に移住するまではずつと始終親しくその教を受けてゐました。その間かなり歌作に勵んだこともありましたけれど、又一方に理學研究に全時間を費してしまつて餘裕のないときも多かつたので、まだほんとうに滿足するやうな歌はさつぱり出來なかつたのです。仙臺に行つてからは一緒に歌をつくるやうな友人達もなかつたので、そして翌年には夙く歐洲への留學の途に就いたので、暫く忘れたやうに歌作を試みずに過ごしてしまひました。そのうち暫く振りで獨逸で作つたものを左千夫先生にお送りしましたら、偶然に頻りに賞めて頂けて自分でも嬉しく思ひ、稍々興奮もしましたが、今から見

れば餘りにその表現が單純過ぎてゐて、とても滿足することの出來ないものであります。併し私にとりてはそれは左千夫先生との交渉に於て得難い記念として殘りました。なぜかと云ひますと、先生はそれから間もなく大正二年の夏に私のまだ瑞西に滯在してゐる頃に思ひがけなく逝かれてしまつたからです。私はその翌年に故國に歸つて來ても、もう先生の親しげな俤に接することの出來ない運命におかれました。

もと先生のもとで知り合ひになつてゐた「アララギ」の諸友はこの頃その歌作に於て異常なる進境を示されてゐました。私は再び仙臺に歸つて來てからも暫くはそれを餘處に獨りで過ごしてゐましたが、だん〳〵と諸友に刺戟されて之に後れがちながら追隨する氣もちになつたのでした。そしてかなりの苦慮を經て漸く幾分の安心を得られるやうな歌も出來てくるやうになりました。私はその經過をふり

返つて見て諸友のお蔭を感謝せずにはゐられません。只私たちの道はどこまで行つても限りのないものでなければなりません。私たちは虔ましくお互に勵み合つてそれを歩みすゝまなければならないと思ひます。

歌集を出版することに就て私はこれまでいろ〳〵の人たちからのお奬めを受けたことも隨分ありました。齋藤茂吉君などは特に消息のついでに屢々それを言うてくれられました。けれども私がいつも忙しくてこれまでの歌をまとめるだけの暇がなかつたことや、又自分の作に不滿足なものをかなり感じてゐたことや、從つてそれほどの價値もない歌集をむりに世に出したところで意味のないことであるといふ感じや、それらの事情が私をして自分の歌集を出さうと決心することに多くの躊躇を感じさせました。併しかなりの年數も經ち、雜誌に發表した歌の數も大分たまつて見ますと、世のなかの人

たちへの氣づかひは措いて自分だけのことを眞實に思ひめぐらした上では、從來の作のうちから自分の現在の心もちにてらし合せて多少なりとも滿足に近いものを採り出しておいて見たくもあり、また散らばつてゐるものを一つに纏めて自分のその時々の姿を省りみ、それを親しい人たちにも見て頂いてその感想をも聞き自分の省察の一助にしたくもあり、そしてそのなかに幾分の價値が見出されるならば望外の幸であるとも思ふやうになりました。斯う云ふ折から丁度昨年の晩秋にこの土地へ來て靜かなしめやかな生活に入つたとき、「アルス」の鎌田敬止君が訪ねて來られて出版のことを頻りに相談せられたものでしたから、私もとう〳〵その氣に惹かれてそれを承諾するやうになつたのでした。それからも再三鎌田君の御足勞を煩はし、諸處の雜誌に載つてゐるものを書き寫してすつかり原稿をつくつて頂き、その外出版に關する一切の仕事をお願ひして、漸くこゝに出

來あがる運びになりました。私はこの間の全君の御盡力を深く感謝せずにゐられません。自分にとつて尙ほ危ぶまれる處の多い歌集が立派に裝つて世に出ることの出來るのはそのお蔭に依ること甚だ多いからです。

私は自分の歌の價値についてまだ多くの自信をもつことが出來ずに居ります。併し私の信ずる處によれば、歌の價値はその言葉や思想に於ける技巧のみに存するのではなく、もつと本質的な內容に求めなければならないのであつて、技巧はそのおのづからなる表現を効果あらしめるために役だつに過ぎません。そのうへに內容と表現とはめい〳〵の特種相を具へて始めて藝術的價値を深からしめるものでありますから、ふだん一語一句を捉へて自分たちの氣にいらないと云つて指摘する多くの批評などを見るたびに、丁度人に面接してその顏面の一黑子や歪みを强いて云爲するものに似てゐることがあ

りはせぬかとさへ私は思つてゐます。然う云ふ態度をもつたすべての人々に聽かうとすることは、その顏面を特性のない人形面につくり上げることに外ならなくなつてしまふのでありませう。私は寧ろそれを避けたいと思ふのです。私は本質的な內容をなるべく人生そのものに近づけたい欲求から、歌作に對して多く謂はゆる連作の形式を採ることの止み難いものであるのを感じました。そして單にそのなかの一首や一句に於てではなく、全篇に亘りてそれが含む感情や氣分を滲み出させたいと希ひました。私が技巧に對してたよらうとする處はその全体に自分が適切にあらはれてゐるかどうかと云ふことだけであります。たゞそれが爲めに私は個々の言葉についてかなり深い執着をもつてゐるのです。たとへそれが他人に於ては並み外れた妙な感じを與へるにしても、私自身をあらはすにはやはりそれでいゝやうな氣もいたします。若しその人が深く私みづからの特

性を諒解して下されたなら、丁度はじめは目觸りな顏面の一黑子がその所持者を特質づけるやうに、それが却つて個性的には必要なものと思ひかへすことが出來るものであるかも知れません。私みづからの思慮すべき處は、その特性が他人の氣にいるかどうかと云ふことではなくて、却つて自分を人間として價値づけるに役だち得るかどうかと云ふことだけであります。つまりその思慮を經たうへで價値のないものは取り去つてしまひ、なるべく價値おほいものを育てあげなければならないのです。私は自分みづから省察することに對してこの意味に於てまだ多く努めなくてはならないと思つてゐます。

私は自分のこの歌集のなかにひろく示すに値しないたくさんの缺陷を含んでゐることを深く虞れます。それにも拘らずこれを手にして頂く人々に對して、その藝術愛好のこゝろを保たせたい希ひから、私たちの尊敬する方々にそのお力ぞへを仰ぎました。この意味で挿

畫をお願ひしました平福百穂、森田恒友、山本鼎、石井鶴三、小杉未醒の諸氏に對して、その執筆の御厚情を深く感謝します。また同じ意味でこの集の裝幀を親しくして下さつた津田青楓氏に對しても衷心からの感謝を捧げたいと思ひます。それらのお蔭で私のつたない歌がどんなに美しく裝はれたかわかりません。

最後にこの集を私が多くの親愛を感じてゐるアララギ叢書の一編として出すことに對して、自分の滿足を表明したいと思ひます。

大正十一年四月一日　　安房保田に於て

著　者

歌集に關することども

一　この集に收めた歌は私が明治四十四年から大正十年に亘りて作つたものです。連作各篇の末尾に作歌の時期を書きいれて置きました。この以前並びに此の期間内に於て作つたものでこゝに載せないものもかなりありますが、それらは多く現在に於て不滿足なものであるためにすべて省いたのです。またもと發表した雜誌を得る便宜を缺いてゐたためにその儘にしたものもあります。併し之等もこの歌集を綴るために必要なものではないと思つてゐます。

一　この集に採錄したものに就てはかなり苦心して改削を行ひました。もと作つたものでその云ひ表はし方が現在氣に入らないと云つても、すぐに今の氣分でなほしてはやはりいけないと思ひまし

た。作歌當時の心もちになつて、同じ連作中の他の歌と同様な調子にゆかなくてはならないからです。それがために度々その連作全体を讀みかへして見てはなほし〳〵して、之にそぐふやうに氣をつかひました。又改削を用ゐないで一つの連作中から數首を省くと云ふことに對しても同様の苦心を費しました。

一　歌の並べ方の順序については、なるべく同じ周圍のものを一處にまとめて、讀むときの氣分を持續して頂くやうにしました。尚ほ各の連作はそのうちの各首の短歌をきれぎれでなく、却つて一篇の詩のつもりで最初から連續的に讀んで頂きたいと思つてゐます。

一　歌の各首の書き方は今日では句讀も何もなしにのべつに一行若くは二行に亘りて書くのが普通であり、私たちもその方を見慣れてはゐますが、等しく三十一音であり、又五、七、五、七、七音

の連續であると云ひましても、實はそのなかに多様の韻律を含んでゐるのであつて、連作短歌の單調の感じを與へないのも之に依ると私は思つてゐます。私はこの韻律の變化を形式のうへに幾分なりともあらはして、視覺に對しても單調さを與へない方がよくはあるまいかと思つて、長詩の書き方と同様に、隨處で行を改めることにいたしました。そして句讀點を正確に施して意味の斷續を判きりさせました。私はそれの必要さを屢々感じさせられてゐたからです。短歌を短册に書くものと思つてゐた時代には、すべての文章に句讀點もつけず、濁音點さへうたなかつたこともあつたのです。今日になつてまでそれを固守して、一度讀んでも續きぐあひが判らず二三度讀みかへさなくてはならないやうにしておくのは、寧ろ迂であると私は思ひます。

一「シベリヤの旅」の後記、「諸の國人の集り」の詞書は大体舊と書い

てあつたものです。私はその外のすべての歌についても文章を書き添へたく思つてゐたのでしたが、やはりその餘裕がなくつて思ひ止まつてしまひました。これは自分にも幾分のもの足らなさを殘してゐます。

目次

序
歌集に關することども
其一 …… 一
信濃の歌 …… 三
山國の町 …… 三
舊藩のなごり …… 一〇

諏訪のたひち……一五
富士見高原……二〇
續信濃歌……二七
國境……二七
國央……三二
終驛……三六
學寮……四〇
山原……四六
其二……五二

學究……五五
實驗室の夏……五五
研究室にて……五六
賜賞……五九
平日……六五
移り住みて……六五
心痩せて……六七
兒ら病める日に……七〇
苧環の花……八三

平生……八六
遲春……九一
冬陽……九五
曇り……九八
病床連作……一〇一

其　三

みちのく……一一七
曇り日のいりうみ……一一九
硫黄採る山へ……一二五

梅雨の日……一二九
暴るゝ海邊……一三三
山裾……一三五
山鳩……一三九
春淺……一四〇
夜の山路……一四二
山かげ……一四六
蠶どきの家……一四九

よそぐに

海ぎし……一五五

暖國……一五九
靈南坂……一七八
高原の秋……一八二
海邊……一八八

其四

歐亞行……一九一
しべりやの旅……一九三
孤村の方へ……一九三
諸の國びとの集り……二三九
……二五五

霧降る國……二九五

挿畫

面頁
八ヶ嶽の裾野(石井鶴三氏)……二
研究室(石井鶴三氏)……五六
松島(平福百穗氏)……一三〇
伊豆湯ヶ島にて(森田恒友氏)……一五四
イルクーツクにて(山本鼎氏)……二〇二
アルプスの山(小杉未醒氏)……二三六
霧のテームス(山本鼎氏)……二〇六

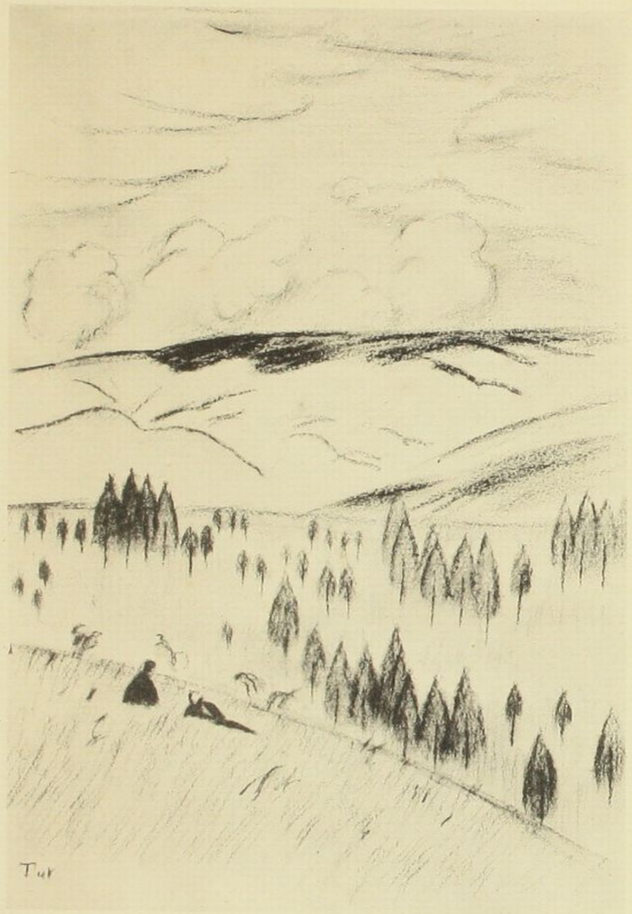
裝幀

紅木蓮(津田青楓氏)

其一

信濃歌

續信濃歌



信濃の歌

山國の町（伊那）

自が生きの忙しさ措きて、
はろけくも山ぐにの町に
我れは來つるかも。

煤くさき汽車の窓べに
うとましく坐りつかれぬ。
ひと日を暑く。

倦みごころしましく湧きて、
山ぬちの町に我が來ぬ。
ゆふ昏るゝころ。

山ふかきくにには入りぬ。
この町の
ひとのおもをば直に視にけり。

天龍の谿にそひつゝ、
夜の電車
人あまたのせてはしりけるかも。

行きちがふ電車をまちて
停まれるひまのながさに
坐り厭めり。

ゆふ遲く町をたどりぬ。
しかすがに山のさ霧のつめたくうごく。

疲れつゝ寢ねむさぼりぬ。
山ちかき宿には
宵の騒ぎ知らなく。

風呂あむと
宿の二階をくだりたり。
水ぐるま水を汲みゐけるかも。

朝の間のひそめる町を
ゆるやかに草履ひきずり
我れはあゆめり。

とゝのはぬ坂みちゆるし。
町のうへの小學校に
この朝我がゆく。

こゝに來て、
ひろき校舍に講義きくひとのあまたを
うれしみて見ぬ。

みちひろき町宿のまへものしづけさ。
人もあらなく、
ま晝日てりぬ。

町宿のこの入りくちの土間くらみ、
燕巣ごもる。
その天井に。

つばくらの巣くへるばかり
くすびたる天井のもと
ひそまりゐるも。

この宿の店表(おもて)より奥にいる
廊下をぐらし。
畫を歸れば。

水ぐるま
たゆき音して水汲みぬ。
宿の座敷のしたにまぢかく。

ゆくらかにこゝろゆるびて
山ぐにの宿に落ちゐぬ。
我れひとりにて。

舊藩のなごり　（高遠）

舊藩のふるき町いま
山間にものさびれたりぬ。
徂くひとなしに。

山ぐにの町街道のひろびろし。
自動車はしる。
その直みちを。

河ひくく谿をながれぬ。
山岨を過ぎて
舊めく町に出でにけり。

町はづれ家並ととのはず。
路のおもの凹き窪みに
ぬかるみひかる。

店暖簾夏ははづして
町並の
家の庇のいまあらはなる。

車降りて我れはあゆみぬ。
縱庇ひくくつくれる
家並續けり。

町並の庇垂れゐぬ。
うすぐらき店の奥には
暑げにひと坐る。

城下まちさびれ果つるを
住み繼ぎて
このこゝろ樸きひとをのこせり。

城あとの山にひと懷ふつつましさ。
いま我がもちて町に降りきし。

街に佇ちて、
おもはゆげなく我れを視る
ちさき兒ながらさみし。
山處は。

ゆふひかりみちゐる空に、
そそり立つ山の黑きに
我れは對へり。

ゆふみちを
ひとの負ひゆく籠目より
桑葉のにほひ洩れたゞよへり。

うしろより車ひくひと追ひ過ぎて
遙けくなりぬ。
くらき畑みち。

米苞を俥にのせてゆくひとを
遲くあゆませ
もの尋ねけり。

諏訪のたひら

山峽ゆ我が出で來たり、
ひろびろと空ながむるも
親しましけれ。

まろきうみゆふ曇りたれ。
すはのくにのひろき平は
明るくおもほゆ。

おもあげて我れは對へり。
まろやかに湖をかこめる
山のなだらさ。

うみ尻を我がかへりみつ。
いちめんに
しろき繭藏ならびゐにけり。

ひと動く忙しさしるし。
製絲場のまへの積荷の
あまたあるなか。

おも知れる郡長に逢へり。
こぞも來て
我れにしたしき町のさまかも。

家ごとに
湯むろはつくり住むといふ
この山の町のいで湯に浸る。

蟲除くと
緣に張りたる蚊蚋を透き、
うみ吹く風を怡こびぬ。われ。

山ぐにの夏ふくかぜは乾びぬ。
濕める膚へに觸りつめたし。

山ながら夏の陽つよし。
女學校の講堂に來て
風をすがしむ。

みなみ向き坂みちくだり、
晝ひかるうみのしろさを
まばゆくも見し。

信濃びとの
なまりをもちて我れにものいふ
ともしさゆゑにうなづきにけり。

隣り村ゆ、
ゆきばかま穿き
我がためのうたのつどひに
來しひとのありし。

富士見高原

にはかに
汽車あへぎのぼる國ざかひ
おのづから展く。
ひろきたか原。

高はらのすぐろなる空
我れは見ぬ。
ゆふべを深むかげはうごけり。

ゆふぞらのひかりたふとし。
いまうごく陰ひろごりて
高原めぐる。

たか原の丘の上たかき望臺に
赤き旗みる。
うつしさふかく。

測候所の望臺に立てり。
ゆふせまる
この高原の空のすぐろし。

すぐろき高原のうへ、
眞おもてに
裾ひく山はいただきあかし。

望臺に佇ちゐてひさし。
ゆふぐれを
山にしきりに雲わきゐけり。

浴衣着の異人ふたりあり。
ゆふぐれの山くろくせまる
望臺に立つ。

高原の夜のくろめるに、
風いでて
われのうしろゆいたく吹きふく〜。

異人ふたり
獨逸語をはなしゐたりけり。
望臺のうへ風ふきまさる。

赤ぬのを帶に纏ひて、
木原ゆく
異人のすがたおほきかりけり。

我等寢ぬる蒲團を負ひて
夜をくろき木原をあゆむ
ひとはうたびと。

樹の香しづむ
たか原なかの淑きいへに
並びて寢つる我等なりしか。

朝ひかりうごく木原に
我れを伴ふ
くにびとのおもて潤ひをみる。

あかときのひかりかそけし。
高原のともしき木原
霧はれなくに。

月見ぐさ黄いろうすめり。
あかときの霧ふる原は
ほのけきものを。

（大正七年十月——八年一月）

續信濃歌

國境（富士見）

くに境たかまり遠(とを)る
山並みの蒼み立てるに
おもむかふ。いま。

響きつよまり
汽車の喘ぎのいちじるし。
傾斜急なる直みちのぼる。

停車驛あらたにひらけ
家尠なし。
高原のすその斜めに續く。

なまぬるき空氣うごける
地のなかの隧道を出でぬ。
陽のいろ眞あかし。

我がおものくろきよごれを拭ひつゝ
煤の深きにさらに駭く。

ゆふ陽ななめにさし來て眩ゆし。
汽車なかの窓に對くひとの
おも皆黄なり。

ゆふひかり凪ぎ廣む
この高原に、
我が戀ふるこころさみしくありけり。

たか原の曇り偏よる
ゆふぐれを、
空の濁りのいや漂へる。

いちじろく黄ににごる空に埋もるゝ
山のおも陰し。
たか原ゆ見る。

高はらを汽車のはしれば、わびしきに
響き昂まる。
昏れふかみつつ。

たか原の木原をよぎり
ゆふくらし。
木のかげ近く繚れ過ぐるも。

境超え高原のうへゆひた降る
我が汽車は疾し。
山黝くなれり。

かぎろひのゆふべは深し。
むらさきに
すはのみづうみゆ靄きらひ立つ。

國央（松本平）

國央（くになかは）

おほきたひらの廣ごりぬ。
我が來つる夜は黑かりしかも。

落ちゐぬこころもて來たり。
山ぐにの街にともしく
夜の燈（ひ）たゞよふ。

岐（わか）れ路山にむかへり。
この驛に乘り繼ぐ汽車のなしといふかも。

商（あき）びとに隣りて宿り、
こころさびし。
卑しき騷ぎに我が親しまず。

さわがしさ
我れを厭（お）しくる夜をひさし。
慣れぬ床ぬちにまなこをつむる。

宿そとに
騒ぎむれゐし群衆の聲ひそまりて
夜の氣つめたし。

我がこのごろ
あり經しことを思ひたどり、
このかりそめの宿にねむらず。

親しめる國のま央にいま息らひ、
我が純なる思ひを禱る。

夜明けどき
しかすがに暑さすくなかり。
山國の街の廣らかなるも。

朝はやし。
停車標のまへうづたかく蘭荷おろすと
ひといそしめり。

狹き汽車にひと乘り殖えぬ。
山ながら繁くゆきかふ
商びとのおほし。

山窪ゆあかき陽あがり朝明けぬ。
丘に桑おほき
美しき山國。

終驛（大町）

終驛にいま我が來り
諸びとにまじりてくだる。
ひろ場の外れに。

この汽車の終驛に降りて
眼にひろし。
空ぬち深く衝きたつ山山。

おもむろに面あげて山を我が眺たり。
山のおもての斑らにひかれる。

空まぶかく山立ち續けり。
果あらぬそのおほき態に對ひゐる。
我れは。

朝まおもに陽に向きたれば、
錆びひかり
山山の容あらはれゐるも。

重なれる山の背後は
ひかり薄みあをみ果てゐたり。
空と見分かず。

終驛の街のひろ場に佇ずめり。
朝さはやかに乾けるすがしさ。

太道を直ぐに駛れり。
山通ひの自動車に乘りて
朝を急げる。

地震ゆりて
壞れし壁のなほ殘る
山ぐにの街をいま我が過ぎつ。

哀しみて我が來しものを、
こころ弛び
重なる山を眼にちかく見る。

終驛をやゝに離れぬ。
ひた續く路のあか土に
夏の日射しゐる。

學寮（木崎）

丘の頭壞してあたらし。
赭つちのあらはなるうへに
學寮建ちゐる。

學寮はまむかひに立てり。
湖べりゆ
赭きつち山のぼりてゆくも。
氷原をもちて聳ゆる山ちかし。
木叢にしげく
うぐひす鳴ける。

朝の間を
學寮にひとら集ひあへり。
おほき山ながめむきむきにかたる。

おも深く默し對きゐる間ひさし。
始めて遇ひてしたしきひとびと。

柱あまた木の香あたらしく並みたてる
講堂のなかに、
虔ましくゐる。

おも並べ講義聞きゐるひとのまへ、
我がたかく立ちて落ちゐずおもへり。

講壇に立ちて
もの虞るるこころ湧けり。
おもてをあげてひとら聽きゐる。

我れの聲しづみゐるならむ。
山の氣の澄みさゆる外に
さびしくひびく。

講義終ふる眞ひるの果を、
軟らかき夏日たゆたひ
やゝ暑くおぼゆ。

曇りだつ山のいただきを眼にあふぎ、
我がさびしみをよそびとに告げず。

思ひひそめ
我があらはさず過ぎ經べき
かなしみをもちしづけさに堪ふ。

あらはさぬ我れにいたまし。
こころ深くなやみをおさへ
ひととかたるも。

藪うぐひす日もすがら聞き、
礎たかき學寮の居間に
くつろぎ坐る。

夏の日の暮れよどみたる山原に、
おもひひさしくも
我が佇ち更けし。

ゆふうみに靄たちうかび、
學寮の灯のともしきを
山すそに見る。

山原（木崎）

驟か雨ゆふ毎に降り、
松の林、杉の林を
濕めらしにけり。

雨ふれば、
落葉松の立ち圍む
うみのおもてのしろく霧だつ。

ひむがしの山に立ちゐる
白樺のひとつ木ともし。
月黄ばみのぼる。

低空に曇りうごきて
水のおもののてりくらむ夜を
山黑くたつ。

雨ごもり霧まよひくだる山原に、
この日膚さむく
濕めりふかしも。

身妊(こも)れる妻にいひおくる言みじかし。
山原にゐてこころなづめる。

ゆふおもくむら霧くだる。
遠く來て
妻に離れゐる我がなやみふかし。

まさみしき憂ひをつつみ、
山はらの夏深むみちを
ひととあゆめり。

ひそかにも戀ふる思ひかも。
うつそみの我れにはろけし。
かの山原は。

吾木香(われもかう)
くろずみふかくさくゆゑに
我れは山原をともしみにけり。

粘土質(ねんどしつ)の崖つちあかし。
山さむく萱草(くわんざう)生ひて
黄にさきゐけり。

高はらは霧しげくくだる。
山腹の桑畑の末、
桔梗いろ濃し。

ともしき山原なるかも。
我がふめる草生のしたに
水わきながる。

ひとの世のなやみを易くわするべく、
この山原に戀ひつつもとな。

山原のゆふべくろめり。
菱生ふる水のほとりを
我がたもとほる。

舊道は山に倚りをり。
廢れたる路のかたはらに
はしばみ實のる。

乳こぐさ白きを摘みて
ゆふちかきたか原のうへに
路をもとめぬ。

ゆふ闇く月の出おそし。
山すそを我がもとほれば
韮を堀るひと。

（大正八年十二月――九年二月）

其二

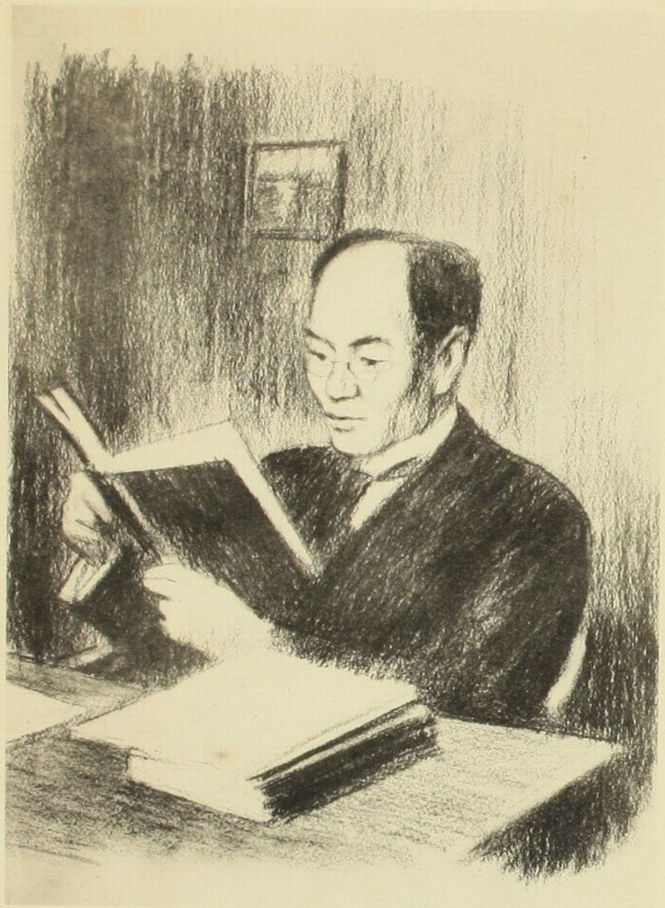
學究

平日

學究

實驗室の夏

夏の休み日の
實驗室は寂しかり。
鋼鐵(はがね)のうへの面錆(おもさび)を見る。



雨降れば
機械油のたちこめて
實驗室のただにひそまる。
毎日の雨量をしるす曲線の
漸にさがりて、
夏終てにけり。

（大正四年八月）

研究室にて

研究室ひたひそまりて
こころふかく落ちゐるがうれし。
冬の休み日。

ほかほかと冬日のてるに逆上せたり。
對數表を引きてゐし我れは。

對數の八桁かぞへぬ。
ひたすらに
その對數を眺めてゐるも。

眼を披きもの見ざりけり。
我れはいま
電子のまはる樣想ひゐる。

電子うごく世界のさまを想ひをれば、
黄なる書物が
我が眼に觸れぬ。

美くしき
數式があまたならびたり。
その尊とさになみだ滲みぬ。

（大正六年十二月）

賜賞

ひたすらに虔しみごころ我れに湧きぬ。
希ひ稀なる賜ものくだる。

我がいささか勵みたりしを、
現しけき賜もの生ると
かつて思はなく。

おのづから好めるものにひた向ひ
こころ足りゆくたのしさを愛づ。

あめつちに深く秘める眞すがたに
觸るべくおもふよろこびごころ。

おほいなる天壌のなか
ひと生れて
おのづからなるいのちをまもる。

天つちに恒變りなき眞ことあり。
そのすがた見むいのちたふとし。

我が現しさほとほと忘れ、
ひたみちにながくいそしみ
悔ひごころなし。

うつしみは
病ひ襲ふといましむる
情あるひとにも我れは背きし。

部屋ごもり思ひ耽くる平常は
うつし身の自が關はりを
措きておもはず。

省りみて、
我が爲ることのいささかを
ひとに遺して慚づといはなくに。

賞を享くるこころ虔まし。
ひろき席に
我が親からのうからもならぶ。

あまたひと我れをゐめぐり、
論らふ聲をあぐると
おもはゆしかり。

眼とぢしまし落ちゐぬ。
我が身ぬち
ささやけき聲の洽く浸みいる。

賜はりし賞に値ひせぬ我れなるを
慮る惶れも人間ゆゑにもつ。

我がいのち易く滅びず。
あり續ぐ日
努め堪へなむねがひを捧ぐ。

（大正八年六月）

平日

移り住みて

移り來て住みなれぬ家に、
さみだれのいく日も降れば、
栗の花過ぎぬ。

住みなれぬ家の庇の朽ちたるに、
しろき黴ふく。
さみだれのころ。

くさも植ゑず、むなしきにはをしきりある
黒塀あせぬ。
しきふる雨に。

朝戸くるくるまの音の
くるくると音する
ふるき家に住みけり。

このくにの家風呂に焚く
亞炭より
燻りくる煙のあまたくさしも。

（明治四十四年七月）

心痩せて

つちのいろは見るに眼痛し。
金屬の音は聞くに鋭し。
いかにか生きむ。

息づけば、
想なき胸をさす如く
空氣の流れ泌み入りにけり。
電燈の球いちじろく黑く見えぬ。
我れの心の痩すを覺えて。
こころ痩せて我れは生きをり。
秋ふけて
冷ゆる疊に我れを据ゑつつ。

秋の來て
我れのこころも寒くおぼゆ。
天地しづみもの冴ゆる頃。

あるときは
小さき塵のひと粒に眺め入りけり。
狂者のごとく。

（大正四年十月）

兒ら病める日に

一

きぞ降りにし雪將たしろく凍りつつ、
あが喉さむく
風だてる朝。

朝おきて
我がおもあらふながし場に、
しろき氷はひかりてゐたり。

おも拭きてさげもたらしし手拭も
すなはちこほる寒さなりけれ。

稚兒のふたり病みいで、
この朝
ただならぬこころわれに湧きたり。

稚兒の病みて臥せれば、
こころぐく我れはすわれり。
さむきひろまに。

をさな兒のなき止むひまを
妻は立ちて髪あげゐるも
靜思なけれ。

稚兒はいねつつもとな。
瞳をあくと
母がはだへをこひて泣きける。

二

さむき空灰ぐもりつつ
くらみゆきぬ。
わが稚兒の病みしづもる日。

稚兒の氣息早みつつしづめれば、
憂ひはわくも。
あなひたぶるに。

わが稚兒肺炎やめり。
小さなる胸に
氣息はもいりせまるかも。

寒き氣息
ちひさき胸を犯したらむ。
我がをさな兒らいとけなければ。

氣息せまり
ものしほたれし子のおもを
こころ憂ひて妻みまもれり。

三

わく兒ふたり
肺炎やみて臥してゐる部屋に湯沸し、
妻とゐにけり。

寢室の隙間隙間を目貼りして、
湯氣こもらしむ。
病む兒みとると。

部屋に入れば、
湯氣のながれのしみじみとむせにほひくる。
ほのかなしくも。

部屋ぬちに湯氣たたへつつ
あたたまる宵しづもりぬ。
兒等も寢らしき。

炭つげば小風呂沸えけり。
しらじらと湯氣たちゆくも。
ゆふべの部屋に。

湯氣たてば、
しろきゐのぐの滲みいでて襖はぬれぬ。
小風呂のはたに。

部屋くらみ、
古りくすぶれる天井の
しめりて湯氣の滴りにたる。

四

子らふたり病みてふせれば
家のなかめまぐるほしみひと日暮れけり。

としうへの子らをばさとし、
宵はやく
部屋を隔てて寢ねしめぬるも。
外のもには霜凍るならむ。
この夜寒み、
わが部屋のなか湯氣に曇れり。

湯氣たちてくもる硝子に、
電燈の燈の黃いろくも
うつりにじめる。

電燈の黃いろきかげに見入りつつ、
我が兒やすかれといのるこの宵。

五

吸入器
しろき蒸氣をふきあげて、
をさな兒のおもひたうつものを。

しほからき蒸氣にむせび
おもそむけ泣ける兒をしも抱けり。
われは。

しろじろと蒸氣はしりぬ。
兒のおもを相對(むか)せつつ
我れはかなしも。

蒸氣かかり
ぬれしとりたる兒のおもを
妻に拭(ふ)かしめなだめしめつつ。

アルコホルの火をふきけせば、
吸入器
しろき蒸氣はふきやみにけり。

六

嬰兒(あかご)病みて乳も飲まねば、
もろ乳房張りなやめりと
妻はなげくも。

病める兒に添ひ臥しながら
張りいたむ乳房ゆ
乳をしぼりゐる妻。

小さなる熱ある胸をはだからし
濕布とりかふ。
こころせはしく。

熱さめし我が稚兒らやすぬして、
この夜過ぎなむ。
ものしづやかに。

（大正七年一月）

苧環の花

春うらら陽はかぎろふに、
部屋ごもり
憂ひをもちてうたたかなしき。

しろき汚染窓のがらすににじみつつ
春日はにごる。
うつしさもなく。

埃(ほこり)しらむひろき巷に
ゆふべひと水まきゐるも。
風たゆく吹き。

春埃しみたつ街のひろきへに
ともがかり住む宿の名もとむ。

さくら草花ふたつ開き
ひと去なむ日を告ぐるごとし。
對きてさみしも。

山の家に
いまは去なむといふひとの
さびしきおもひ慰めかねつ。

青き丘
圓らに町をめぐりたり。
春おそき日はゆるやかに照り。

きみがやまひかならずよしと、
苧環のむらさきの花
さくを待ちにし。

きみに逢はず久しと思ひ、
羊齒の葉の伸びゆく朝を
ひとりさびしむ。

雨ふり來て
こゝろにはかにしたしみぬ。
梨の花しろく落ちしけるゆふ。

（大正七年六月）

平生（つね）

一

朝じめり空氣やはらかし。
みちのおもに
おほわたしきりに飛びゐたりけり。

霧薄くこもりてぬくし。
みむなみに
ほのじろきひかり浮める日かも。

郊外にあゆみ來て冬をひさびさし。
あらはなる山の膚赭みたる。

ゆふべ靄しろさはてなし。
枯原をひとりあゆめればともし。
我が生は。

瓦燒く町郊外に續きけり。
この晦日もけむりはあがる。

雪はらを我がたどり來つ。
蒸氣だてるくろきながれに
ぬくみをおぼゆ。

街なかの大林區署の敷地あと、
雪ふればひろし。
冬木ほの立ち。

二

みちのくを寒しとおもひ、
木綿ごろも
風邪病めるよひは厚く着にけり。

休み日を家にこもりぬ。
電燈の
こよひはやくも點るをみたり。

雪持てる屋根のかなたに、
黄ばみゐる夕ぞらのひかり
ともしみにけり。

黄のいろの淡めばさみし。
ひそかなる空をしたしむ。
さむきこころに。

向學のよろこびに浸り、
日ねもすを部屋にはこもる
其の日續けり。

我が庸のこころを嘆息き
終日
思ひ索むるくるしみおぼゆ。

倦みごころしましく湧けば、
反りみて
我が生くるすがた遙けくもおもふ。

みちのくに冬遠る陽のいろしろし。
この日ごろ妻の惡阻やみゐる。

（大正八年二月）

遲春

墻のうへに木蓮さけり。
くろずめるあかき花のまへに
しましうなだる。

おほきなる木蓮のはな、
春の日向
風にゆすれてちりしくものを。

うららけく淡き濁りぞ充ちわたる。
はる日のもとを緩にあゆむも。

ながくあゆみて懈さおもほゆ。
病める胃をもちて
このごろただに倦ましき。

葺き更へし藁屋根のおもあらはにみゆ。
春おそき陽の黄のいろふかし。

胃を病みてひさしく癒えず。
ひとりゐて
春ゆくゆふをこころ鬱げり。

（大正八年五月）

冬陽

冬木の幹肌滑らかにひかりを帶び、
晝ぬくむ日をしみらに吸ひ居り。

赤き煉瓦の新らしき家居ここに建ち、
曇り日のそら賑はしみみゆ。

氣象學の煉瓦室建ち
赤いろの壁ひかり居り。
冬めく日なたに。

蒼み照る冬空ふかし。
頸(うなじ)あげて我がうつつなく
陽をあみ佇(た)てり。

冬空の水凍(い)て果てたり。
新らしき煉瓦のおもて
しろく乾ける。

希臘もじに似ると煉瓦の罅(ひび)を見けり。
風ふきて寒く我がおもを撫づ。

氣象學の煉瓦室の傍をひた通り、
われのいのちのまづしきをおもふ。

（大正九年一月）

曇り

春の陽はうらさびしもよ。
關はりなきよそびとのおもを
日日に我が見つ。

こころなく
よそびとに對かふさびしさに、
我がおのづから寡なくかたる。

苧環のむらさきのはなちりすがれぬ。
希ひむなしくはてゆくしるしに。

桐のはな
あまき粘みをもちてさく
曇りのなかに我が佇ちひたる。

曇りごころ我れにはだかり
おほほしきゆふべはさみし。
桐の花みて。

曇りゆたかに陽のめぐりしろし。
かたまりて桐の花さく。
ゆふべのにはに。

むなしさは
落ちしづる桐の花にまさる。
くろつちのうへにおもくなづみて。
かへり來ぬひとまてばさみし。
つゆぐもる
ゆふべのそらのくらきに見いる。

（大正九年六月）

病床連作

一

みちのくはいまだ寒きに、
はからずも熱たかく病む。
こよひにはかに。

流行りゐる風邪にあらなくに、
熱病めば
われの思ひは安からぬかも。

熱たかく續けるゆゑに、
ほてりゐる自が額に觸れ
いたく慄へし。

病院にきたり見てかなし。
いくばくの病めるひとびと
寢ねゐるものを。

病室のいりくちの扉
わが寢ぬる眼にあをみみゆ。
ゆふ果てぬれば。

二

飲みにくき藥をふくみ、
はからずも病めるうつそみを
かなしみにけり。

ほのかに熱のあがるをおぼえつつ、
ましろき壁に眼をうつしみる。

藥の汚染(しみ)黄に褪せのこる
そのままの藁蒲團より
眼をそむけけり。

我がひねもす思ふことおほし。
身の痛みやや薄らげば、
さびしさまさる。

病舍なかの廊下をあゆむ人おとも、
宵すぎていまはひとときに絶ゆ。

仰むきて熱度表見つ。
かりそめに病みてひさしきを
さびしみにけり。

にがき藥くちにふくみて、
我が病ひちかく癒えむと
ひとには言ふも。

病院に慣れてものさびし。
藥換ふる時刻(とき)待ちがてに
こよひは寢(い)ぬる。

くろき布ひたおほはしめ、
電燈のひかりともしきに
夜すがらを寢ぬ。

病みぬればめざめたやすし。
さくさくと氷わるきこゆ。
この夜ふかきに。

となり部屋ゆ
慘きうめきのきこえくる夜ふけはわびし。
我がめざめゐて。

三

病室のまどのがらす戸冷えくもり、
こよひ外のもには雪のふりしく。

祖母のみまかられしと報らせこし
このぬばたまの夜のひそけさ。

雪ふかく

みちのくの野に降りみたし、
我がおほははの喪に遇へるこよひ。

おほははの喪におもむかむすべもなく、
我がこやる日を
雪さむく降る。

春といふに
雪しきり降るひねもすを、
我れの哭きは盡きざりしかも。

祖ははのいのち終れるみ面さへ
見むことかたし。
とほく病みゐて。

くろき煙り空にあがらず。
むらむらと雪もつ屋根におもくかゝれり。

祖ははのいのち死なすと
なきたれば、
ゆふかたまけて熱いでにけり。

四

雨ふれば春ながらさむし。
くろずめる櫻のみきのわびしくも立ち。

我がおもふひとにも遇はず。
春さむき病ひのとこに
雨をききをり。

うつそみはいたづきおほし。
離れゐるひとも病むといふに
遇はずかなしき。

蒸氣(じやうき)しろじろ庇ゆ漏(も)るる病舍(びやうしや)をば、
みなみの窓ゆひもすがらみる。

腎臟を病みて日ひさし。
接骨木(にはとこ)の汁食しけりと
かつて告げ來し。

きその夜を
僚が空しとつたへくる
春雨の降る空いまくらし。

數學にすぐれたりしが、
このともものいのちわかく終ふ。
いたましく病み。

病む床に寒さをおぼゆ。
ひと死にていのちはろかなり。
雨ふるこよひ。

ゆふぐれて燈はきらめけり。
死にゆける僚がうつしみは
移されてなし。

あらしめく風ふきやまず。
病室に
この夜電燈のはためきて消ゆ。

五

我が病みてこゝろ果敢なし。
雲しろく天にながるれば
春まさに蘇る。

みなみ窓日射しあたたかし。
わが病める床に明るさを
うれしみにけり。

病む床に日射しをうけて久しければ、
我がかたおもの日に焼けしかも。

はる日さす病院のにはに、
緬羊のくろきがふたつ
くさの芽食むも。

病室のまどそとにちかく山羊きたり
角を觸れ居り。
まくろき土に。

ひさしき病とみによろし。
めだしくも山羊啼くをきく。
春たそがれ日。

家なる子がかきおこす手紙なれば、
おのづから愛(かな)し。
我れは病みゐて。

我が病ひ癒ゆるにちかし。
朝の間を
病院の風呂にひとり浸れり。
病める身をひさびさにゆあみ、
泌みとほる湯の氣を吸へり。
むさぼるごとく。

（大正十年四月）

其　三

みちのく
よそぐに

みちのく

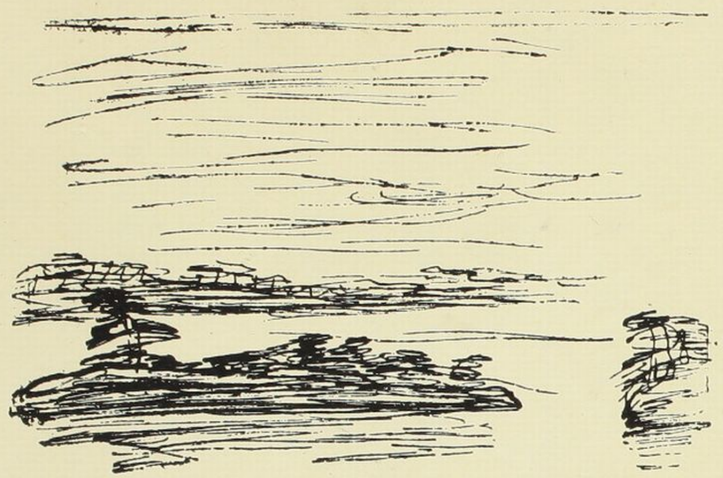
曇り日のいりうみ

八月五日赤彦兄の北海道旅行の途次、立ち寄られたのを迎へて、共に鹽釜のうみを渡り、松島に瑞巌寺を訪うた。曇つた空からは時々雨が降つてゐた。靜かな穏かな氣分の日であつた。

むらむらと雲わきおほふそらのもと、
黑くかこめる
灣をみる。

いりうみのひろきおもてに
そこばくの島ならびけり。
曇りてくらく。

眞夏日のくもりなやまし。
午後の日を
藻ぐさぬるめる
いりうみわたる。



我が二人
船のへさきに坐りゐぬ。
いりうみのうへのくもりは落ちず。

くもり日を藻の浮く海のたひらかに
ほとほとはしる。
しろき汽船は。

潮にぬれ
しろき土質のあらはれし
島島のうへ松生ひにけり。

松生ふる島にのぼると、
赭塗りの橋わたりゆけば
雨落ちきけり。

杉ばやしくろきうしろに、
にんげんのこもり住みにし
洞ならびゐる。

あかちやけて寺内に立ちぬ。
南蠻の燈らう
雨にぬれゐたりけり。

甚五郎の彫を見にけり。
み幸ありし大玄關の
閉ざされしうへ。

寺の廊ひろくつめたし。
案内の時言を誦して
僧ゆきもどる。

濱べちかく
觀瀾亭にわが坐れば、
小蒸氣の笛ひた鳴りひびく。

歸るべき人をのせつつ
小蒸氣のいでゆく濱べ
潮みちぬるも。

船泊けば湊にぎはし。
蒸しあつき氣のおそひくる船室のなか。

夕ぐもりすこし明るみぬ。
漁師らが膚のあかさを
湊べにみる。

（大正六年八月）

硫黄採る山へ

硫黄溶くる湯はしろじろとながれゆきぬ。
そのにほひ充つる秋の湯の街。

秋さむき空氣のなかに
硫黄湯のにほひ堪へずも。
病むといはなくに。

湯の街の
うしろの山をのぼりたり。
硫黄のまじり黄いろなる山。

赤埴の山に明るくひかりさし、
見るにめづらし。
硫黄のけぶり。

山のうへの中凹みたるにたたへたる
水のま青き噴火口沼。

ものすごく澄みとほる秋のひかりかも。
湖ぞこにしろく硫黄たまれば。

動くものなきまさびしき湖のかたはらに、
青けぶり立つ。
硫黄採る小屋。

硫黄こぼるる黄いろき桶がならびたり。
火を噴きし山の
うみのかたへに。

小屋ぬちにただひとりの男の子
硫黄もゆる爐をかきてをり。
さびしみ深し。

硫黄の火むくむくと燃えたちにけり。
灰に埋もるゝ爐蓋のしたに。

硫黄の
つよきけぶりにむせびいり、
咳すればいのちかなしも。

泥みちをふみて
ふたたび湯の街にくだれば、
人のあまたにぎはふ。

（大正六年十一月）

梅雨の日

梅雨の日はそらに翳あり。
相ならび汽車にすわりゐて
曇りをおそる。

あか松の林を透きて
トロのひゞき鳴り過ぐ。
梅雨の曇り日の晝。

しづかなる山莊にとほく海を見ぬ。
梅雨なかばにして
海鳴はげし。

さびしめば磯廻は哀し。
土やまをひとの崩すと
爆藥うづむ。

土爆くる音きこゆれば、
山裾に
あはき火煙あをみて見ゆる。

海ちかきこの岩山の岩間に
湯むろはつくりひと湯浴むらし。

（大正八年六月）

暴るる海邊

風暴れて砂狂ひふぶく
磯濱のすさまじきなかに立てり。
我れはも。

海のおもてくろ波あがり
ひた寄せに
この砂濱をまさにふたげり。

暴れ空にはからず來り、
ふきこぞる砂のまなかに
身を塗(まみ)るるも。

海くろく潮鳴りゐれば、
漁(いさ)り處(と)に
ひとのけはひもひそみあらなく。

みづから責むる痛ましさもち、
荒らぶる海の暴らしに
立ち浸りしか。

天に息づくおほ暴れのひまに
海にむき、
くろく搖らげるさか濤目もる。

足りごころ我れにすくなく、
あめつちの暴らびすさぶに
いで遇へるいま。

歸り待つ
馬車の待ち合ひの板床に
砂をふきため暴れかせ止まず。

（大正八年八月）

山裾

ゆふぐろく
なゝつの峯の立ち狹む
さびしき村にひとをとひ來し。

白木槿
夜のくらきまどに
うす白きひかりをつつむ。
我れにともしく。

ゆき慣れし山のいで湯に
我れをともなひ、
木苺の實のあかきを摘める。

ゆふぐらき蠶飼の部屋に、
桑の葉の
匂ひをふかく嗅ぐも。わびしく。

あしびきの山かげの沼に、
まさびしく
睡蓮の花のゆふたち萎む。

あかときをひそかに目ざめ、
霧うすき河原にいでて、
さびしみなげく。

我がむしろさびしみ索めたどり來し
丘の木ぶかみに
山鳩のなく。

霧うすきほのけきみちに、
葛の花
見探す朝のあゆみかなしも。

あまづたふ陽のかげむなし。
かなしみを我がなく朝を、
山に霧ふる。

月見ぐさほのぼのひらく
ゆふ庭に、
いま薄れゆく黄のいろ愛しむ。

（大正八年八月）

山鳩

足あかき山鳩の雌を
籠に飼ひて
かり住みの家にひとのこもれる。

山鳩のかなしらになく曇り日は
ひとと語りて暮れはやきかも。

（大正八年九月）

春淺

みちのくは春の陽淡(あは)し。
野路を來て
雪しろくてる山の條(すぢ)みる。

春淺く
みどり芽(め)ごもる樹肌(こはだ)さむし。
雪やまとほく空にひかれる。

春日てるこの村にいりて
連翹(れんぎう)の黄なる花みぬ。
みちべ明るく。

枯草原冬のまま黄なる丘のうへ、
日はぬくみゐるも。
ひとと來ぬれば。

日のぬくみ
枯草原にしみとほる
丘の頂きゆゐをき空みる。

岩くゆるふるさと道に、
春くさのむれさくはなを
我が爲めつみし。

ひかり薄れ
ゆふ山のくろさせまり來ぬ。
野を燒くけぶり空にあをみて。

（大正九年四月）

夜の山路

憂ふれば
しろき夜靄も我れになつかし。
とほき山路にこよひ來にけり。

ふたがはは丘ながく續けり。
みちのおもてたゞしろくみゆ。
夜ぞらのもとに。

雲のうごきたゞならずさみし。
あゆみいそぐ夜の山みちに
汗じめりおぼゆ。

にはかなる雨にうたれて、
夜をくらき道よりあがる
埃のにほひ。

よひ雨のにはかにはげし。
山道の林のなかに降りそそぐおと。

驟か雨ふりやみしあとを、
濡れしづる木の枝つたふ
雫をきくも。

峠みちのぼりきぬれば
しらじらと夜霧はうごく。
このもかのもに。

寢しづもる山の村廻にわがたどり、
戸を漏る灯さへ
見ぬがさぶしき。

人にあひて我が言訴ふ。
白むくげゆふべを萎む
山の家ゐに。

（大正九年九月）

山かげ

あか松の林つゞけり。
この路を
わがいくそたび佗しみあゆみし。

病むひとの車のあとゆ我があゆみ、
山路はさびし。
ゆふべ陽あかく。

うら枯れし秋桑畑に、
羽しろき鶏ついばめば
さびしきものを。

ゆくひとにあふこと稀なり。
坂路は
山のはざまをいく廻りせる。

くれなゐの窓ぬのたらし、
自が部屋に病み臥すひとの
いのちかなしき。

病みふせるひとのまなこゆ
おのづから落つる涙を
我が手に拭くも。

熱ほてるそのおもいたはし。
歸りいぬと我がいひよどむ
病むひとに對きて。

落葉はやき林を透きて、
あらはなるとほ山の襞
くろずみてみゆ。

（大正九年十一月）

蠶どきの家

一

壁しろく塗りたる家の二階べや、
明けしらむひかりほのぼのといる。

山に來てこころさびしからず。
霧しらむ朝のひかりに
すがしく浸る。

この家をかくめる木々の
ほのじろく泛びゐるみゆ。
霧深ければ。

我がめざめてこゝろうつつなし。
玻璃まどのそとに
ましろく霧ながれゐる。

二

寢ね起きに廊下をゆけり。
蠶部屋より
桑のにほひのかそかに洩れくる。

明けはやみ
この家ぬちもひそみをり。
しろき猫ひとつ廊下にねむる。

夏の蠶はいまだ稚なし。
背戸にそひ
柘榴のはなのあかくさきゐる。

四

家裏につづく桑畑に
朝いでて
くろく熟れたる桑の實をつむ。

桑畑をゆるくめぐれるささ川の
川砂しろく陽にひかりをり。

桑の實の熟れたる汁の指にしみ、
うらなつかしきわが思ひかも。

このあした
川芎の葉をひとと摘み、
しるきにほひをむさぼりにけり。

おのづからながるるこころ相たもち、
夏の蠶どきの家にゐるかも。

（大正十年七月）

よそぐに

海ぎし

停車場ゆいでてみち闇し。
海ぎしに
墻をめぐらすしろき家あり。

海ちかき宿をもとめてとほく來つ。
ゆふべ昏れはてて寒くあゆめり。

別莊の門奥まりて
みちはばのわづかにひろし。
狗ふたつまもる。

夜のみちに
しろき狗ふたつうづくまり、
とほるひとらをみまもりにけり。

ひそかなる命まもりて寢ぬる夜を
かそけくひびく。
海の波のおと。

いり海の渚につづくひろきみち、
鴉おりあゆむ。
朝の濕めりに。

鴉くろく
我がめのまへにおほいなるかげをつくりて
砂はまに飛ぶ。

砂はまに照りきらひゐる
朝の日の安けさにひたり、
しまらくを經つ。

砂はまに貝をひろへり。
まがなしきいのち足りゆく
虔しみごころ。

（大正九年十一月）

暖國（伊豆伊東）

湯宿

雨ふりて木立濡れをり。
湯の宿に、
湯をあびて來てしづかに居るも。

丹つゝじのかたまりてさく
ひろ庭に、
いで湯わきゐて湯氣たちのぼる。

雨ふれば、
いで湯の湯氣のしろじろと、
木立のもとをながれゆく見ゆ。

湯の宿のしづけき部屋に
ひと日こもり、
槇の芽だちのいろづくをみる。

この部屋にとなるものなし。
ふかぶかと庭の樹立ちの眼にあをきかも。

梅雨にはやき雨ふりつゞき、
濕めりゐる木立のもとを
あゆむひとなし。

この朝を遲くめざめて、
母家裏に、
いで湯堀るひとのきほひ聲きく。

鐵瓶に煮えのこる湯を
茶にいれて鹹味おぼゆる
雨の日なりけり。

いで湯わく
この土に汲む水なれば、
けふもしほ鹹き茶を飲みにけり。

夏蜜柑と百舌鳥

朝陽あたる土やはらかし。
夏蜜柑のしろき花びら
落ちしきにけり。

沒藥の匂ひをおぼゆ。
風なきにほろほろと散る夏蜜柑の花。

夏蜜柑の樹にちかづけば匂ひくすし。
しろき花ふかく葉にこもりさく。

夏蜜柑の花のしろきをめづらしみ、
我がたもとほる。
陽のさすもとを。

陽のひかりあふるゝ庭に
ひとときをゆるく歩めり。
湯ごろもを着て。

夏蜜柑花さく庭に、
もず鳴きて、
ほがらかに霽るゝ日のあつきかも。

飛びがたく枝にとまれる
もずの子のくちばしは愛し。
しきりに鳴けり。

鵙の子は翔りてちさし。
籠にいれて、
ひとの育くめば生きがたきかも。

籠におきていのちよわれる
もずの子に
藥を溶きて水飲ませけり。

湯風呂

湯氣こもる湯風呂にちかみ、
枇杷の實のいまだ青きが
雨に濡れ居り。

しほからきいで湯に浸り、
湯あがりに
ぬくむからだのあからみにけり。

渦まきていで湯わきくる湯のくちに
手を浸しをれば、
湯はこぼれゐぬ。

ひとのいのちのくすしきを我れは思ひつゝ、
いで湯に浸る。
この夜のおそきに。

雨の日は湯の量おほし。
湯に浸り、
わきあふれゐる湯を目守りをり。

このゆふぐれ、
こゝろこほしく湯に浸り、
いで湯を汲みてくちにふゝむも。

二日つゞきあらし雨ふり、
湧ける湯も濁りだてるに
けふ浸りをり。

つちのしたにいで湯わくなり。
我がいのち
愛しさをもちてとはに生くべく。

我れに來むさびしきことを
ひそかにもこの夜はおもふ。
はやく寢ねつゝ。

しみじみとこゝろ泣きたり。
ひととゐて、
いひ解きがてぬさびしさをもち。

閑日

病みてあゆまず。
家裏にして麥畑の黄ばむをみたり。
雨はれし日に。

湯のながれ泉水にいり、
さむき日は、
ほのぼのと湯氣のたちあがりをり。
雨來るらしく山に靄たつゆふぐれを、
ともしくもあるか。
我が湯あみきて。

この宿に
顏みなれたる湯治びとも歸りゆきつゝ、
雨さむく降る。

我が部屋を二階に換へて
はればれと障子あけはなち、
樹の梢みる。

病ひ守りて湯の宿にひさし。
人のたちし二階のへやに
けふ移りすむ。

ゆふ餉どき炭つがしめつ。
移りきし二階の部屋にこゝろくつろぐ。

湯治せる人もすくなき閑(ひま)どきを、
いで湯堀るころ
のどかにきこゆ。

海ちかきこの町に來て、
海のべにあまたはゆかず。
病みてこもれり。

芝山の蘇鐵のかげに
しばしゐるこの晝どきを、
汽船のおときこゆ。

この湊にいりくるならし。
晝たけて
汽船のおとを間ぢかくも聞く。

あらしあと、ひと日雨霽れず。
雨にぬれし木々の芽だちを
二階よりみる。

槇の葉のしなやかに伸び、
梅雨ちかき雨やまずけり。
病みてひさしく。

湯の町のあたり

さゝやけき湯の町に來て、
我が病ひの藥をもとむ。
雨ぐもる日を。

いで湯湧くくにあたゝかし。
ふかぶかと木立ちめぐらす
家あまたあり。

たかだかと材を結ひ立てゝ
いで湯堀る
郊外のみち慣れてあゆめり。

陽おもての山のいたゞきに、
黄ばみゐる麥畑のうね
しろく並べり。

山すその畑みちに來て、
海あをくひかれるをみる。
町屋根をこえて。

ゆるやかに陽のてるもとに、
あまねくも
蜜柑の花の匂ひこもれり。

ゆふぐれを
海のほとりをたもとほり、
地曳網ひく群をみにけり。

網曳くを我がめづらしみ、
ゆふ濱に
ひさしく立てば熱いでにけり。

ゆるやかに聲あげて曳く太綱(ふとづな)の
輪にたまりゆく。
砂濱のうへ。

網ぐちゆ
舟に落つる魚夥し。
舟傾ぶけば魚ひかりみゆ。

(大正十年五月——六月)

靈南坂

靈南坂
降りぎはちかき廣場みち、
ほのかにうごく霧のなかゆく。

坂みちのふた側につづく塀のなか、
樹々さむく立ち
朝しづかなり。

雪うすく屋根並にのこり
凍えひさし。
この坂みちのひろきをのぼる。

石塀のとほく添ひゐる坂みちの
このしづけきに浸みゐるしたしさ。

この坂を降りくる人なし。
昨夜の雨のやや乾くみちは
凍りてありけり。

廣場みち空氣しづもれり。
交番の巡査おもむろに
たたずみ目守る。

さむき日の
こころ獨りなるさびしさに、
坂みちのうへゆとほ空をみる。

坂にそひて立つ石塀の斜面ながし。
おも向けてとほく來しかたをみつ。

高臺の街なみしづけし。
わがひとりけふもあゆみ來て
洋人に遇ふ。

さびしさは極まるものなし。
したしめる人の家ゐに
むかひ來につつ。

冬樫に埃(ほこり)ややたまる
坂うへの十字路にきて
朝さむくおぼゆ。

(大正九年十二月)

高原の秋

八ヶ岳すそひろく曳くたか原に、
我が病みて來てかなしきものを。

たか原に雨ふればさみし。
ゆふたけて、
松の林にしづくする音。

雨ふりて驟かに寒し。
まどそとの白樺の木の風にゆするゝ。

あらし霽れて。
みむなみの山の山襞のくろぐろとして
眼にちかくみゆ。

ましろなる霧くだるなかに薄みつゝ、
松の林のおぼろかに立つ。

信濃のふじみが原にとほく見る
ふじのたかねはあをいろをせり。

幹あかきをみな松おほし。
女松の林のうへに
ふじをみしかも。

むらさきのまつむしぐさの群れさける
たか原のうへは
ともしきものを。

たか原のくさむらなかに、
いろあかく木瓜かへり咲く。
秋のまなかを。

丘のうへをひさしくあゆめり。
落葉松の林のなかに
みちをもとめて。

牛乳をあたゝめて飲む
火鉢べに、
山の氣しづかにながれいるかも。

ひとり病めば、
この宿びとをたよりつゝ、
氷枕を更ふるよひかも。

裏背戸の雨に濡るゝに
あゆみ啼くしろき豚の子を
あはれみにけり。

秋いく日雨ふりやまず。
別れゆくひとをおくりて
さびしき夜かも。

わが病めば、
こゝろかなしく來しひとを
われを離れてかへすべからず。

かそかにも殘る炭火をかきおこし、
火鉢なつかしむ。
秋の夜ながら。

みなひとに別れゐて
我れはたか原のこの靜けさに
浸るべかりし。

（大正十年九月）

海邊

風落ちて曇りひろごれり。
しづかなる海のうへにも、
冬のさまみゆ。

人むれて網曳きどよむ
この濱に、
海の曇りはしるくしありけり。

田舍まちの電燈くらし。
夜々のくらきにも慣れて
さびしきものを。

こよひまた、
海風はげし。
砂もちて戸にあたる風のさら〳〵に鳴る。

（大正十年十二月）

其四

歐亞行

歐亞行

しべりやの旅

一

生きものもなき赤肌の山見ゆる
この北のくにに航り來しかも。

税關吏

厚き外套に軀を纏ひ、
船に入り來るが不氣味なりけり。
棧橋をゆけば我が小さし。
手荷鞄を傍に挾みて街に急げり。

我れ始めて異くににある不安さに、
街を歩めば、
空灰いろす。

我が耳に痛き音して、
辻馬車は街を走りぬ。
冷たき街を。

堪へがたし。
この廣きみちの一面に
凹凹なせるまろ石ふめば。

辻馬車はあはれにさびし。
御者臺に
重たき體をはこびのせゆく。

街角に覺束なげに佇めり。
ろしや酒うる舗をながめて。

裏べには、
北支那の人の雜り住む
汚なき街もありにけるかも。

空はなほ灰色なしぬ。
寺院のうへ
黄金の十字架がひかりけるかも。

ひたさびし。
街を歩めばひたさびし。
振りかへり見ぬ。
我が來し街を。

心いそぎ停車場に來て、
ひたうごく空氣のなかに浸りぬ。
我れは。

あやしき異樣のことば耳に聞き、
落ちゐぬさまに肉食をせり。

二

雪空に立つ赤肌の山さへに
いまは親しも。
獨りし在れば。

しべりやの旅のはじめはさびしけれ。
この赤肌の山にしたしむ。

街の上をゆく人の面の異なるも
わがさびしさをそそるに足りぬ。

見慣れぬ
ふしぎなる樣のかなしけれ。
我が翌の日に不安をそなふ。

停車場に少しのひまを物思ひて
戀しくなりぬ。
今見し街が。

雪降りぬ。
汽車に搖れつつ不安なる
わがこころ少し落ちゐる思ひに。

汽車のなかの一區劃なるわが室に、
徒すわり居つつ、
ひろき野をゆく。

山赭し。
しろき木膚の白樺の
さむくならぶもそこにふさはし。

山のうねりゆるくまたゆるく、
大いなるしべりやの野はひろごれりけり。

ろしやの囚人らが追はれくる
荒れし地なり。
しべりやの野は。

囚人のさびしく住めば、
この濁きしべりやの野に街もあらずけり。

ただ赭き濶原なるに、
たまたまに
白く凍れる河のうつくし。

褐色の停車場がふと見えにけり。
いと白きいと白き雪はらに。

停車場のひそまれるまへに、
女ひとり黑き頭巾を被りて立てり。

停車場の名をかかげある
ろしや字が眼に觸れにけり。
たゞにさびしく。

三

胸ぬちに親しきものもありがてに
外をながめけり。
いまだ昏きに。

汽車の搖れに
窓のおほひのはたはたと
わが隙見せる頰に觸れやまず。

あかときの眼にとほく見れば、
しべりやの野はおほろかに灰いろなせり。

潤原より吹きいれる砂の一夜經て
窓の木緣にたまるもさびし。

不馴れなる汽車の寢臺におきいでて、
服よそほひぬ。
よそびとのまへに。

くに潤うして
孤りある街のうたたかなし。
陽のかげしろく沈めるふゆを。

耳さぶき空ひびかしめ、
敎會の鐘のなること頻りなる朝。

停車場に
牛乳を賣るなりはひのをんなも在らず。
聖の日なれば。

不相應に停車場のなかが大いなり。
日曜はみせの空しく閉ぢゐて。

日曜を群衆すこしうづくまり
薄日なた陽を浴みてゐにけり。

灰いろの空うすらぎて青みゆく
日をよろこびぬ。
街びとら居て。

めづらかにものこそばゆき思もて
我がながめけり。
異しき人らを。

この寒き冬ぐにに生きて
至默に飽き浸るならむ。
さびしき人の面。

酷しくもまた寒き冬の續きぬれば、
火酒嗜みぬ。
しべりやびとは。
地のうへに復活祭の來る日を、
街びと待ちぬ。
つつましやかに。

四

黒き豚野にあゆみゐる
支那領は樣異なれり。
支那びとら居て。

荷を搬ぶ支那びとかなし。
停車場の赤煉瓦やや冷ゆる朝を。

しべりやに入れば、
再び大いなる野にろしやびとら寂しく住めり。

ばいかるに注ぐ河卑くながれけり。
やうやく汽車に我が飽き來る日。

天垂るる遠きさかひに、
ばいかるは限りなく白く
浮びいでにけり。

北に倚り地のはて近きしべりやは
尙寒き日なり。
湖凍りつつ。

めづらしく空霽れゆきて、
湖傍に
地のはてらしき山あをく立つ。

裸なる山脈きたり、
湖のなかに突きいでにけり。
荒べるさまに。

湖べりの崖のあひだに、
隧道の數のおほきが
こころうばへり。

涯なきこほりのうへを
橇ひきて馬がゆきにけり。
眞はだかの馬が。

ゆふ空は灰いろになりぬ。
いやしろきばいかるのうみゆるく包みて。

うみぞひに
赤煉瓦の家くろずみてひとつ見えにけり。
ゆふぐれちかく。

我が汽車は
小さやかなる停車場を素通りゆきぬ。
うみ昏るるとき。

五

ばいかるの湖を離れて
街明るきしべりやの首都に夜着きにけり。

眼たゆく朝ごころ憂し。
汽車に飽きていや搖られつつ、
曠野をゆけば。

あはれなる低木生ふるに
冷たげに水ひたりけり。
ひろ野のなかに。

停車場に汽車着きにければ、
半鐘の合圖がさみしく
曠野になるも。

汽車に焚く薪を積める
停車場のひろ場は寒し。
人氣もあらなく。

味淡きばいかるのうみの青魚を
我が食しにけり。
ろしやびとのなかに。

つち赭き山脈みゆる驛にして、
寶石賣りの男見にけり。

冬頭巾あつく被れる農婦らが
卵賣るなり。
停車場に來て。

落葉樹一樣にたてるあひだより、
しろく彩れる山の脈みゆ。

しべりやの無碍におほいなる野をかぎり、
空をわかてり。
うらるの山は。

ようろつぱとあじやの境しるすと云ふ
塔を見にけり。
遠く我が來て。

蒼ばみて
うらるの峰はたかだかと
我れのゆく手に暫らくは立ちぬ。

六

憂ひごころ我れに昂まり夜となりぬ。
うらるの峰は空に幽けく。

微かにも空に薄みて
うらる嶺の
山脈ながくつらなるを見る。

そ、あの樹疲せて立ちけり。
夜の來て黑くかさなるも
さびしかりけり。

わが體の斜めにもなる心地して、
汽車降りゆきぬ。
急匂配を。

うらるの、山踰えはてぬ。
ひたくだり汽車駛りゆくも、
さびしくありけり。

うらる嶺の麓なだらに低まりゆき、
沼多にありぬ。
冬木のあひだに。

大河ゆるくめぐり流れぬ。
はてしも無く潤くしあれば
ゆたけかりけり。

草の青み見ゆるもともし。
しべりやの不毛のくにを
我が過ぎ來れば。

うらるのやまの彼方なる
平坦なる沃野に
ろしやの街ありにけり。

沃野なる街をのぞめば、
教會のまろき屋蓋
たからかにそびゆ。

なべてしも人敬虔しき街なれや。
聖なる寺に十字ひかりぬ。

日久しく汽車にしあれば、
足底に
地の面ふまむ希ひわくかも。

相こぞり
停車場のまへを踏みあゆむ
人ごころこそはかなかりけれ。

鐘鳴れば
停車のひまの遊歩より人歸りくなり。
遽しげに。

ひろき野を我が西にゆき、
大いなる驛見ることを
慰みにせり。

大いなる驛さへにさみし。
しべりやに移されてゆく
穢き群れあり。

哀しき、もろもろが
汽車の函ぬちゆ、
飢うらしき面を見するも慘まし。

十日駛せて
汽車モスクワの街につきぬ。
空いとさむく朝みぞれせり。

春おそきろしやのみやこは、
毛裘をなほ厚く被て、
をみならゆくも。

赤煉瓦くろずみてたつ
街々の舊き姿に
怩みたるかも。

（大正五年一月――七月）

嘗て歐洲への留學の途を私はシベリヤに採つた。ウラジオストックからモスクワ迄十日の間を廣軌の汽車に搖られながら通つた。私は先づシベリヤの尨然として何もないのに驚いた。それからいつも同樣の原野を過ぎて其の單調に飽いた。けれど私は遂に其の際限なく偉大なのに嘆ぜねばならなかつた。歐洲は多くの珍らしさを私に與へたけれど、シベリヤの廣大は私に最も深い印象を殘したものの隨一である。私はそこを始めて海を亘りて旅する不安の心地を以て行いた。風俗を知らぬことや言語に通ぜぬことは、不馴れな私を著しく怯懦にした。けれど萬國寢臺列車は私のあらゆる不自由さや心配さを無くするに足るだけの便宜を與へて、怯懦な私をして廣莫たるシベリヤをよそに過ごさせてくれた。狹い汽車の窓から切々に私の見たシベリ

ヤは、隨つて極めて表面的な外觀であつて、其の眞髓に觸れてゐないことは勿論であると思ふ。シベリヤは或は不安の心地を以て暗く沈ましげに私が見た樣な寂寞さを實は有つてゐないかも知れない。或は又之に反して明るい歐洲へと志して行くと云ふ平和な想から全くは離れられない私の心には及びもつかぬ悲慘を藏してゐるかも知れない。私は併し私のありの儘の境遇から見たシベリヤを叙べて、其の中に私の平靜な心が外界の不安によりて攪き亂されてゐるのを髣髴したいと思うたのである。寂しいと歎ひ、哀しいと叫ぶのも私の生命から湧いた寂しさや哀しさではない。併し偉大なるシベリヤが私の生命に强迫的に共鳴させたそれらである。さうしてシベリヤが私の生命の中に殘した著しき印象の世界には相違ない。

シベリヤの偉大なやうにロシヤの人は大きい。私は始めて此處に來た日に私の眼前に立つ稅關吏や汽車の搬荷夫や辻馬車の御者の偉きな體軀が私を壓して不安を增させたのを覺えた。停車場の柵外に卵や牛乳や其他の食品を賣つてゐる農婦や、眞白な雪原の中の踏切の赤塗の垣の傍に立つて黑い頭巾を被つて綠旗を振つてゐる踏切番の女さへ著しく大きかつた。併し後に外國で出逢うたロシヤ人の中にはそんな目立つて大きい感じを私に與へた者が尠なかつた。底知れぬ偉大なシベリヤの背景を私はさう云ふ處にも結付けて見出した。

二年後の四月に、併し往路とは半月程遲れて私は圖らずも再びシベリヤの偉大さに接する運命を有つた。稍旅慣れた私はそのときは出來るだけ其表面から入り

込んで見たいと云ふ餘裕を心にもつて居た。萬國寢臺列車に依らずに私は殊更に露國國有列車を擇んで乘つた。さうして澤山の食糧や寢具を携へて乘込んでくるロシヤの人と話をしたり、停車場の食堂に忙しくかけつけてロシヤ料理を味つて見たりした。私はシベリヤの偉大さを、更に新しい多くの興味を以て彩つて感じた。そこには自分の旅に伴ふ不安の感じは薄らいで居た。むしろ同じ地に再び出逢ふ淡いなつかしささへあつた。けれど私はまだよそながらにシベリヤの彫大な眺めて居たことは謂ふ迄もない。

私のシベリヤの旅は斯うして終つたけれど其の特異な印象は今でも私の眼に新しく蘇るに足りる。

孤村の方へ

一

夏すぎて我がかなしかり。
偶然いで遭ふ
人のこころは我に關はらず。

あるぷすの深山奥に、
我れを待つ
孤つの家のありと思へや。

八月の晩き日光が
車窓より我が膝にさす。
人少なきに。

さながらに悸ふこころのわきしとき、
湖細まりぬ。
山のあひだに。

山あひの村さわやかに、
石をきる人はたらきぬ。
その面くろし。

灰いろの背嚢をおひ山攀づる
若きをみなごも我れにめづらし。

漸くに峰の險しさ。
ならび坐る老婆つつましく
眼を閉ぢにけり。

汽車のおとしげくまたゆるく、
山壁にひびきゆくとき
こころ昂ぶる。

峯しろきつめたき雪の
直胸に觸るるがごとくながめぬ。
我れは。

かの峯を往き來する氣の
すがすがしく我れを包まね。
浸みゆくまでに。

あはれ崇き峰をかこめば、
奥深き空のさまこそ
たゞ青かりし。

二

眞晝まのひかりあふるる空の青み、
眼に生き生きと浸みとほるかな。

すつきりと雪にけだかき山巓の間ゆ、
つつましきこころ青空を見る。

塵ふかき空氣の層もうすらぎて、
日光すくすくと我が肌にさす。

底づよくさす日光あび我が歩めば、
汗しとど湧く。
默せる額に。

天つちの光みち居る草はらに、
今ひそみ生るる生命たふとし。

あるぷすの雪山がめぐる草原に、
あはれめぐしもよ。
我が辿る家。

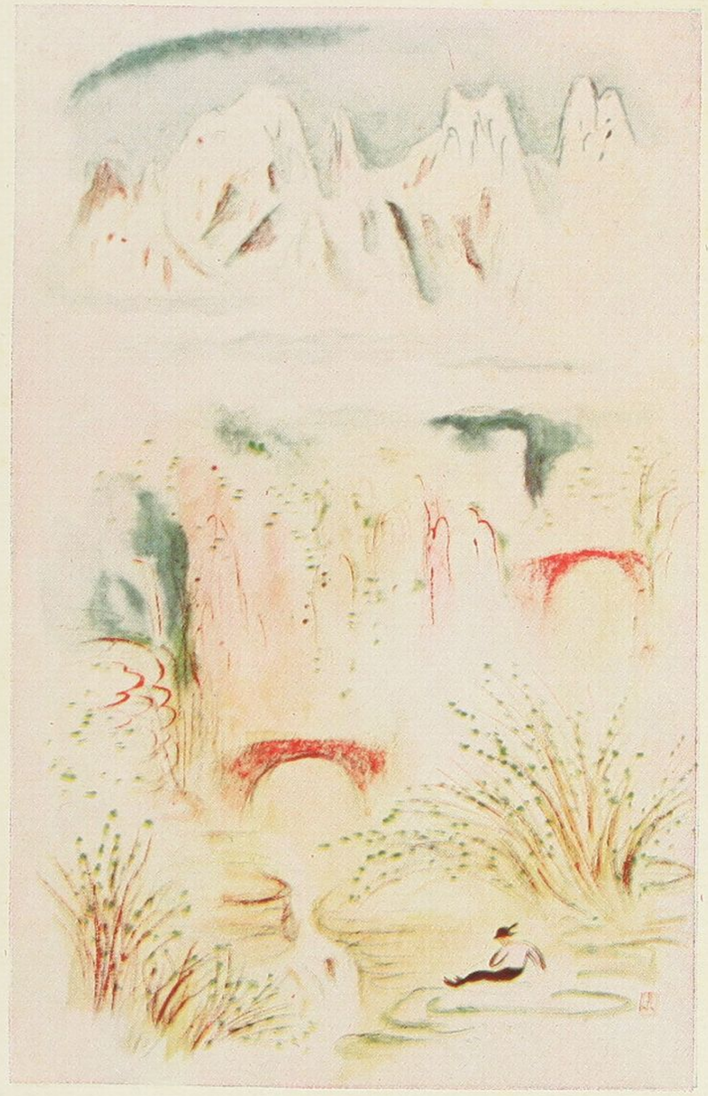
明々と日のさすかたに、
色あかき家根見えにけり。
山すそにして。

重々しき雪山のすそに、
木づくりの家無造作にたてられてあり。

軟らかき草原ひかる夏の日を、
主婦家をいでて
山羊とあそべり。

牧牛は
鐸のおと響く頸ふりて、
山のくさはらに草食みて居り。

山影は黒く冷めたく、
草はらの上をしとやかに
移りゆくかも。



ゆふべ寒き空を
ひかりのうすれゆけば、
氷河(ひょうが)あざやかに白くのこれる。

白みたる空いとさびし。
わが髪に
ひえびえと夜の氣ぞしめりける。

三

あるぷすの山は眞黑し。
小さなる夜の宿に
我がしづやかに居れば。

夜の室の天井はひくし。
眞うへにて人のあゆめば、
みしみしとなる。

木地の壁煤びくろむに
夜の燈のまざまざとさす。
さびしき部屋に。

油繪の肖像のまへにならび坐る
主婦のかたおもは
燈に明るめり。

裸燭の黄いろにさせば、
いまだわかき主婦のおも
いたく老けてみえけり。

夜の室にまなこ疲れて見つむれば、
漫畫像しろく壁にかかれり。

朝らしきここちになりて眼ひらけば、
牖戸明るみぬ。
あたらしきさまに。

がらす牖戸あくれば面さわやけし。
つめたき朝の氣はあふれつつ。

朝はやき岩山かげに
ひびき鳴る牛の鐸音めづらしも。
山は。

朝の陽は紅くさしぬれ。
山すそに、
湧きたまる霧のすくすくに消ゆ。

朝霧のたち消ゆるしたに
眼眸むけ
めづらかにわがもの眺めけり。

朝の日の羨しさに
山羊の子はよりぬ。
鹽溶けていづる岩たり水に。

食堂に主婦われを待ちぬ。
朝なれば、
くろきかふええを沸てゐたりけり。

山ぬちの孤しき宿に、
我れはもののあはき味ひを
うれしみにけり。

物置藏が家かげにありき。
新らしき牛酪のにほひ
充ちゐけるかも。

山小屋のをぐらきに我れは覗き見ぬ。
牛酪たまる桶の深みに。

四

あるときは、
颱風になづむ空を眺て
主婦かなしみぬ。
孤なる宿に。

飄として風ふくもあやし。
眼ひらけば、
空になづさふ陰もあらなくに。

空氣層に塵もうかばず。
皮膚灼くる紫外線つよく
ひかりはさすも。

日にやけし彼女の面を
ゑのぐ赭く
義兄の畫きしが壁にかゝれり。

山の女ははやく嫁ぎていのちかなし。
愛しきまろ面ぞ
うす曇りたる。

年わかき主婦はいたまし。
宿借れる異國びとらをたゞなつかしむ。

山に辿り宿かる人のそこばくに
淡きなぐさみを念ふ夏の日。

あるぷすの夜の宿はわびし。
いく樣の異訛いひて
人かたりあひぬ。

しばらくは
ぎたあの絃のひびきのこり、
賑ひあはき山の夜あはれ。

夜を黑き山にひびけば、
金屬のするどき音こそ
きくに堪へざれ。

山の脈

あらはにひかりきらきらし。
白き氷河のましづかになだる。

山の氣のしめりしとしとと
乾きゐる草に滲みぬ。
朝明すがしく。

あるぷすの白よもぎぐさあまた摘み、
しろき柔毛をなつかしみけり。

岩のうへゆ、
羚羊の牝のあたま見ゆ。
こころ哀しきをみなとゐれば。

秋されば
羚羊は山に獵られけり。
山に宿るひとの歸りいぬる日。

客人の去ぬればさびし。
このあかとき
雪降りおもるあるぷすの山。

いちにちにいち度郵夫が通ひくる
山路盡きにけり。
宿のうしろに。

五

あるぷすの山に雪降り、
さむざむと
氷脈は峯を埋みけるかも。

朝ごとに沸るかふえよりしろき湯氣

寒く凝りのぼる日となりにけり。

桶ぬちに
あをく黴びたる乾酪の
匂ひは胸に堪へずしもあり。

聖約翰の日を五十日經れば
宿閉づる
さびしき山のをみなぞかなし。

宿戍るをみなはあはれ。
蠟型の贄を齋へり。
かなし忌日に。

羚羊のかなしくも山に啼ける日に
孤りの宿は
閉ぢられにけり。

しろじろと厨の壁はひかりたり。
宿もる主婦に別れつぐれば。

癈りたらむ宿のごとくに
閉ざされぬ。
その屋瓦の赭かりしかも。

山毛欅の樹のみきはくろめり。
わが去なむ宿べのかげに
さむく立ちつゝ。

山羊の子は食鹽をもとむと、
飼女らは掌をなめしめぬ。
愛しきゆゑに。

氷河さむく
あをめる空にひかりたり。
山のたか原をわがたどる朝。

楡のかれ木
たか原にひとつ立ちにけり。
われのうしろを風いたく吹く。

煤けたる金の繪ありぬ。
山のうへの尼寺のやねに、
曇り日さむく。

たか原に
州のさかひを標したる境標がかなし。
日かげ向きゐぬ。

境標を超ゆる午時かも。
山脈はしろくひかりぬ。
展くるそらに。

（大正五年九月――六年一月）

諸の國びとの集り

一

春漸く暖かならんとする伊太利の旅を終へて
其の夢のやうな古典的な氣分に浸りながら私
はアルプスの山地に向つた。

天はろけく
大あるぷすの山脈は重なりてたてり。
我が向く退邊に。

復活祭の日のよろこびに、
もろもろの山ひかり
天明るみにけり。

みんなみの山青みゆけば、
くに人は
山にくろ酒を醸むといふかも。

芽の和む樹々はうれしも。
よろこべるくに人は
野べにまろびゐにけり。

乳菓つくるにほひは甘し。
ほのぼのと
春めきし野べを流れたりけり。

生々しく青じろみたるあま梨の花粘み、
日はやはらぎて照る。

くさ原に
ひかりやはらぎあたたけし。
牛のはらばひ嗅むをみる。

二

新しく嶮峻の山嶺の中へ入つてゆくと、さすがに旅愁をそそらずには居ない。

汽車に搭じいち夜をゆられ、
このあした
氷河ま寒きくに原に來つ。

夜の明くる汽車の室ぬちに
案内記をひらきて見るも。
いまだ夙きに。

案内記を閉ぢて再た見ぬ。
あやしくも尖れる山のいちじるしきに。

わがゆきて宿らん街のおもざまを
地圖に想ふも。
たよりあらなく。

われにならび坐るひとらが
言ひ談る訛りまさびしく、
耳べにさやぐ。

わがひとり異國に住まむさびしみの
うたた湧きけり。
日のかげあかく。

汽車のいち夜ねむり足らはず。
うづがゆき我が眼に泌みて
日は光り行く。

三

アルプスの連山を横斷して、汽車は美しい湖畔をめぐりながら瑞西の都、チユーリツヒの街へと近いて行つた。

山饒きくにをゆきつれ。
展けたる街の郊外の
この眼にうれし。

限りなくひろき郊外の林檎園に、
花しろき日をいたく愛でにけり。

氷河なほしろく凍れる山嶺を。
草もゆる地の遠空に見る。

藍いろのみづうみ湛へひかりたりぬ。
草蒲ゆる凹き地のなからに。

四

チユーリツヒの停車場はさすがに大きかつた。そこには雜鬧した都會らしい氣分が溢れて居た。併し諸國の人々に開放された自由の國にふさはしく、狹い改札口などさへ全く設けられて居ないのは如何にも寛つたりした感じがした。

眞對へば
硝子のやねは燻ぶりてくらくおほへり。
停車場のうへ。

あかき日のあやしく陰り
こゝろとほし。
停車場にふかく汽車入りゆけば。

煤ぐろき停車場のなかに降り佇ちぬ。
ひとのもろもろの出で終つる間を。

後れゆくさびしきさまに、
我が知らぬ異くにの街の停車場を出づ。

くづれゆく人群の後に隨ひて、
われ直いでぬ。
明るき外に。

うつくしき山の國なり。
諸のくにびとつどひ
街に住みにけり。

五

停車場に荷物を預けおいて、私は覺束なくもすぐに街へ出て、好きそうな場處に自分の數ヶ月の假寓を求めに歩いた。

ほかほかと春日ぬくめば、
廣場なる石のおもては
孵たまりたり。

あたためば、
街の埃のたちよどみ
空のにごりのいちじるしけれ。

とぼとぼと我れはあゆめり。
疲れつつ
舗道のうへをゆき厭きにける。

いし道のかこめるがなかに、
朝禮の鐘たゆたへり。
わが足たゆく。

埃かぜ乾きてふくも。
我が疲れて、
異國の街に宿もとむる日。

六

街の東方に立つてゐるチューリッヒ山の半腹まで市街が續いてゐる。登山鐵道で私は其の中途まで登つて行つて、もう街はづれに近い新らしい街々を歩いた。市塵を離れた閑靜が私の心には限りなくうれしかつた。

山腹の街をしゆけり。
赭いろに
煉瓦の家のならびゐる街。

あかいろの煉瓦の家のまへに佇ち
往きためらひぬ。
ましづかの晝。

しづかさの深き晝なれ。
はしどいの花匂ひよどむ。
山腹の街。

わが住まむ室もとめつつ門に佇てば、
春日あたたかく
疲れをおぼゆ。

七

山腹の靜かな街に私は假の寓居をもとめた。
自分の部屋の窓の下はすぐに低くなつて、樹
木の間から遠くに續く街々が擴がつて見える。
街の向うのチユーリツヒ湖の蒼い水や、その
上に遙かに連つてみえるアルプスの山々がど
んなに私の眼を慰ましたか知れない。

朝おきて窓のもろ扉をひた押せば、
ひかりみなぎる。
眩ゆきまでに。

濃きいろに溶けなづむごとく、
乳に似たる水液ながる。
朝はやき空。

空に充つる水液わかれ、
爽やけき朝のひかりに
しろじろと垂る。

冷やかに面觸るる朝の氣のなかに、
しろくした垂るひかりを見つも。

朝の氣にひかりとほれば、
煩はしく
街のおもかげ浮びいでにけり。

朝はやき陰薄るれば
あめは宏し。
まどに立ちいでて遠眺むるも。

もろもろの街雜りあへる
地のおもてあらはれいでぬ。
朝空のもと。

山腹の家ゐはともし。
硝子戸ゆ
涯りなき空の境を見るも。

眼に觸るる光眞づよし。
街に續く
みづうみのいろむらさきにてる。

八

暖い蒸されるやうな日が來て、心が弛んでくると、私にはやはり寂しさが湧いてくる。

ひとり眼ざめ朝ごころたゆし。
寛やけき寢臺のうへに
みづからを顧る。

壁に貼る土耳古更紗の模樣さへ
慣れて異しまず。
めざめたる眼に。

朝おそき食堂にきて、
擾れたる卓にすわる
我がもの懈く。

髮の毛をむさむさにせるろしやびと、
われにものいふを默に聞きをり。

朝ぐもり身ぬちなまぬるし。
牛酪の融けゆるむ面に
脂なだるも。

ものたゆし。
朝のかふええをくろくそそぎ
苦きをのめり。
泌みとをほるまで。

九

暖く憐ましい夕ぐれの日は暮れやうとしていつまでも暮れない。それも時には異郷の哀感を伴はずにはゐなかつた。

黄昏のひかりはながし。
薄れつつなほきえずけり。
地のおもてに。

緯度たかきくにに我が住めば、
天づたふ日のくれおそき空を異しむ。

十

おなじ下宿にはいろ〳〵な人間が住むでゐた。年をとつた婆さんも居れば若い學生も居た。それが殆ど外國人の寄り合ひである。夕餐の後などに食堂で話のはづむ事も屢あつた。異つた種々の民族の生活的接觸、そこには強い執着は見られないけれど、離れ〳〵のうちに時にはおのづから心を惹かれる姿もあつた。

諸のくに人すめり。
朝ゆふを
相いであへるしたしみごころ。

ゆき逢ひにかそかに笑めり。
淡々しきうれしき心
おのづから湧く。

もろびとの集まり住めば、
夕つどひ
たはふれするにわれも混れり。

醫をまなぶろしやのをみなの
ゆたかなるそのおもざしに
對ひ見しかも。

ゆたかなる肉にひそめる
まがなしきこゝろのなげき
偶に聞く。

たらちねのくにに背きて、
久しくも孤り住みぬれば、
涙おほからむ。

くきやけく面はゆるひとの
ひそやかに哀しむに
夏の日は落ちゆけり。

靄しろく立ちおほふ空に、
夕ほとり熱き屋並は
かくろひにけり。

靄ふかみ
麓のくろき街なかに、
燈はともりつつにじみてみゆる。

くに俗を興ずるひとら、
或る宵を
我れに絹着せて手觸れめでけり。

ぼおらんどの若きをんなに
象形の文字ををしへぬ。
夏の宵べに。

夜をくらきひむがしの陵の
いたゞきの眞ぶかきにみ入る。
窓をひらきて。

異なれるくにに我が在りて
天ひろき夜空にめぐる星座をみるも。

ひかりしろき北極星のきらめくを
厭かず眺めぬ。
異びとのなかに。

十一

さすがに此の國第一の都會は大きかつた。その中には獨逸語や佛蘭西語をつかふ人間が雜多に住むでゐた。併し私は美しい環境を愛でながら、尙ほいつも孤獨を感じなければならなかつた。

薄ぐらき都會のうへに、
ひろごれる雲ほのじろし。
憂ひてみれば。

夕ぞらを黑く傾めたる
もろもろの家根の尖りも
我に疎まし。

あるときは
我が未だ慣れぬ街をゆき、
しろき家ながく續くを見けり。

相連なり人らむれゆく街のうへに、
我が孤りあゆむこゝろはさみし。

十二

賑かな街のうしろには、古めかしい汚ない小路があつた。好奇心からそんな處を通りぬけると、汚くるしいやうな生活のさまが眼に觸れてくる。

埃くさきにほひ噎せるぬ。
石じきのふるき街べを
我がさまよふ日。

くろびたる煉瓦のかべの面濕り、
こもりただよふ。
くらき路べに。

あやしくも日のいろ闇く、
慘ましき街のつづけば、
寂しくあゆむ。

きたなき勞働者らが
うちむれて街を眺てゐたり。
酒場のかげゆ。

十三

孤獨に飽きて、私はチューリッヒ山の頂に躍度靜思に耽つたか知れない。

わが立てる山は眞黑し。
遙かなる天ゆ降りくる夜霧はしげく。

街のうへに夜の光りの充つる樣を
われはみるかも。
遙けき山ゆ。

もろ人の群をわが離れ
夜をひとり山にし佇てば、
天はふかしも。

ひかりたる街は遙けし。
おほ空は夜は闇きに
霧たちゐけり。

十四

チユーリツヒのテヒニツシエ、ポッポシユーレで私は始めてアインスタイン教授に逢うた。言ひ難い敬虔と喜悅とに充たされながら私は近代物理學の革命を成就したこの若い碩學に相對した。

名に慕へる相對論の創始者に、
われいま見ゆる。
こゝろうれしみ。

われの手をひたすらにとりてもの言へる
偉いなるひとを
まのあたり見る。

世を絶えてあり得ぬひとにいま逢ひて、
うれしき思ひ湧くも。
ひたすら。

うれしめば、
教室のなか明かりき。
偉いなるひとにわが對ふいま。

まろき眼はひかりてありぬ。
その瞳我れに向きつつ
和みたりしか。

厚みたるくちにもの言ひ、
あたたかみ溢るるが如き
情したしも。

部屋のなか
空氣ふるひて流れたりぬ。
我があふぐひとの息にいるべく。

偉いなるひとを我がみぬ。
うちひそみ默居るに
いや面したはしく。

十五

教室の人々の中にも種々の國人が雜つてゐた。水曜の夜毎に開かれる談話會の後に、それらの一團は相連れ立つて街のカフエーに行つては盡きない論議を繰返した。

夜の會終ふる時刻頃を、
學者らのむれぞよめけり。
教室のまへ。

かすたにいの並樹まぶかき夜のみち、
人はたからかにかたりてゆくも。

街燈のひかり流らふ舗道を、
黑き帽子のひとら並みゆく。

學者らのむれともしけれや。
山腹をくだりていゆく。
光れる街に。

街なかのかふえの庭に、
夜おそく語り疲れて
おもゐひにけり。

銀のごとく霧しろくくだるこの夜を、
ともしみて山に歸りゆくなり。

十六

僑住のいち日をながき思ひして、
けふも
論稿に我が親しめり。

室の隅にこもり坐れり。
寢臺のしろき褥を
默に眺につつ。

わが寢むと
脱ぎける靴を室の扉の外に置きけり。
更くる夜過ぎて。

頬かはゆきかのはしためが
この靴をふき拭ふならむ。
朝の夙きに。

ひとりさびしく寢臺にねて
夜おそみ瓦斯の燈を消す。
垂り金を引き。

十七

脂濃き夕餐頻りにうまくなり
山懷かしき國に住みける。

隣りべやに
らいん產れの寡人住み、
われに愛らかに禮なせりけり。

髯あかきをのこならび
ながき夜を肉食しけり。
明き燈のもと。

十八

白き札に
天文街とかきてある
山腹のみちまろく曲れり。

落葉しく
天文街のくだりみち
遠くひらきて低空のみゆ。

（大正六年二月——十一月）

霧降る國

一

潮ふくむ暖かき氣のながれくる
空に霧ふる
冬ふかきくに。

かりそめに住みけるものを、
冬は來(き)り
霧のふかきにおどろきにけり。

霧ふかく朝あけゆきて、
霧ふかくゆふべ昏(く)れゆく
あわたゞしくも。

たゞしろく霧はふりゐぬ。
朝おきて
まどの硝子の外(と)の面(も)をながむ。

霧こめてふかくしあれば、
部屋のなか
しめる匂ひのしげくおそへり。

かりそめにひとり我が寢ね、
部屋のなか
霧の匂ひをしれる朝明。

霧こめて朝陽とほらず。
ほのぼのと
街ゆくひとのかそかにもみゆ。

おほらかに霧ふるくにに我がすめば、
晝のくもりも慣れてよどめり。

こよひしも霧たちなむか。
あたゝかみ
ひとりの部屋に爐はたかずけり。

さ霧ふり
こひしむゆふをひとりゐて、
あめにみなぎる流れをおふも。

ぬばたまの昏(くら)きに生くるさびしみの
わきておもほゆ。
霧のふかきに。

二

みなみかろく海より吹けば、
冬ふかきこのくにはらに
霧たちにけり。

たまたまに霧薄らげる日のくだち、
野べのひろきにいづるともしさ。
脂(あぶら)ぎりくろずむ街の空をはなれ、
薄き日てりぬ。
冬めけるなか。

さびしみをこゝろに持ちて、
郊外に
家の盡きたるひろはらをゆく。

ま裸(はだか)の地平(ちへい)のうへに、
青き丘浮べるごとく
まろびたりみゆ。

霧ふかく空つつむ冬を、
ひろ原に
青き芝くさおひひろごれり。

かりそめにこふるおもひに、
ひろはらの青みなつかしむ。
風にふかれて。

ひろはらに
冬木素枯れてしろく立ち、
空にわきたまる水を吸ひけり。

風車ひろき翼をうち擴げ
田舍家のやね壓してゐにけり。

風車ひろき翼の面垂れて
おもくうごかず。
灰いろぞらに。

しろき家寒けくたちぬ。
さすらへる我れのこゝろに
空しさまさる。

仰ぎみれば
日輪あかく冬がれの木のまにうかぶ。
薄霧のなか。

霧たちて空をおほへり。
陽日のあからめるかげ
ひとり浮める。

おほぞらを愛(かな)しみおもひ、
霧ぬちのひかりなき陽をみまもる。
我れは。

よどみゐるあかき陽のもを
白じらに拭ふがごとく
霧はながれぬ。

霧ながれ
あかき陽のおも隱ろへば、
あめつち白みひかり昏(く)れけり。

三

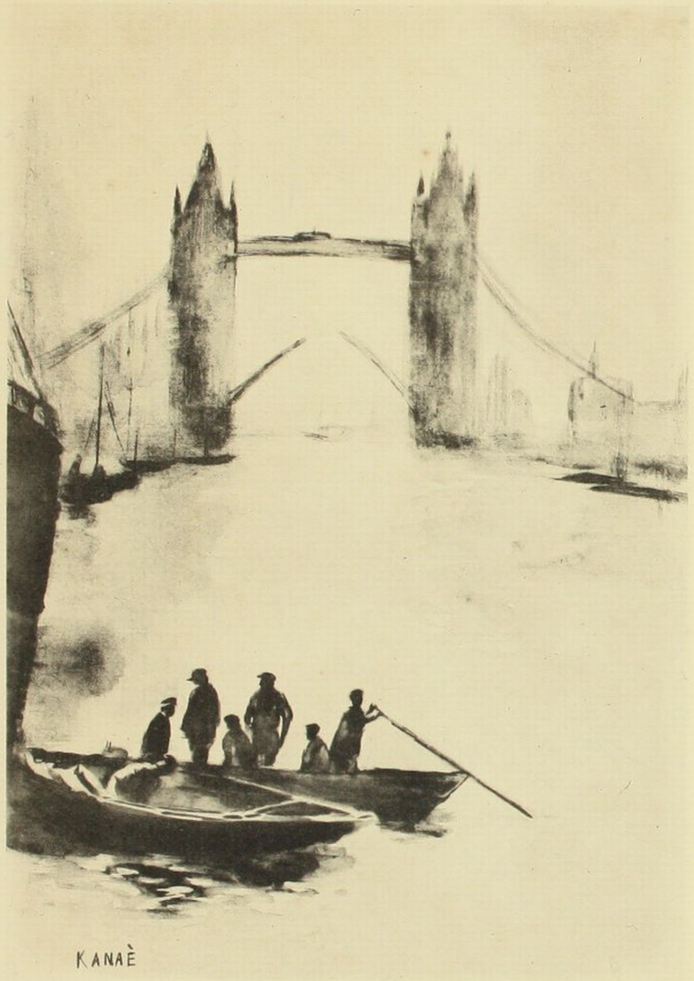
てえむすのながれのかみに我がゆきぬ。
霧の白める冬の眞なか日。

たひらなるくぬちことごと霧みちて
白めるがなかを我はいゆくも。

霧おほふくにべにしあるを、
遠ゆきて
しらめるはてをほのたどるかも。

霧つつむくにのひろはらに、
水くろみ
ゆるきながれはさめぐりにけり。

ほのぼのと霧たつもとに
ひそやかにながるる水のありて
黝(くろ)しも。



ながれ寒く
しろき鷗のおりゐるがはつはつ見ゆる
霧のなからゆ。

霧ふかき川のあなたに、
赤煉瓦ならび立てるを見たり。
めだしく。

めづらかに霧のおくがゆ、
松に肖(に)る異樹(ことぎ)を見るも
われになつかし。

ひとりしづかに、
霧ふるくにをさまよひて、
我れにしたしき樹々もとめけり。

わびしさに我が飽きゆけば、
野べのはて
霧たちあがる。
ひくき木叢ゆ。

樅の木のしみ立てるなか
さめぐりてわがたどるもよ
霧ふかきあさ。

しとじとと霧濕めるなかに
樅の木は伐られてありぬ。
匂ひまぶかく。

霧ふかきこの朝、
ひとは樅の枝を曳きて
家居にかへりゆくなれ。

はしき子ら
降誕祭をうらまちぬ。
樅の冬木を家にかざりて。

霧うごき、
酪農場の白きかべ
しばしあらはれてまたかくりたれ。

霧うすみ、
農場のつちくろぐろとあらはれて見ゆ。
冬さびながら。

四

天つちのあやしくくもり、
黄いろなる霧
あがまへに充ちむらがるも。

黄いろなるくろめる霧の
そらおほひわだかまる日は、
街べはくらし。

いちめんの天ふたぎつつ
くろき霧おほにながれぬ。
この街ぞらに。

くろき霧しづもりくだり、
おほいなる街をさながらに
とこ夜となせり。

くろき霧しげくこむれば、
もろ向きに人のいであひ
ひたおどろくも。

ま晝まの霧のくろきに、
街かどの燈はともせれど
煤びみえなく。

街燈のひかりにじみて
霧ぬちにほのかに黄ばむ。
このま晝まを。

霧ふれば街べはくらし。
我が住みて慣れぬ巷に
ゆきまよひつつ。

異なれるくにのはたてに我れはすみ、
霧のくらきになげかひにけり。

五

久しくも陽のかたち見ず。
ひと冬を霧にこもればありがてにけり。

霧昏むこの街さびし。
おほいなる寺にはゆくも。
鐘ひびく朝。

寺ぬちに
霧の匂ひはひろごりて
かそけくも立つ。
くろき聖像。

おほいなる聖堂のまへに
我が佇ちて、
霧にかくるる屋瓦をみるも。

聖の日を拜むとひとは
くろき衣被つつゆくなり。
霧ふる街を。

息(やす)み日のうちひそめれば、
ひろき街、
霧にとざされ昏れぬ。
日ながら。

このま晝、
地下鐵道の隧道(すゐだう)ゆ
霧ふかき街にいでてさびしも。

うつしよの霧ゆのがれて、
底ふかき隧道に入り、
電車をまちぬ。

あはつけく霧に昏れゆく塔橋(たふけう)に
佇(た)ちみまもるも。
しげきゆききを。

公園の
冬木しらじら霧に昏(く)れ、
夜空に煤は濕(し)めり落ちなむ。

煤ふふむ霧のあやしく落ちくるを
ひたにおぼえぬ。
濕める夜ごろは。

霧おもく煤びくだるを
我が着つる襟のよごれに
みるがさびしき。

霧昏し。
こよひはむしろ籠りゐて
ひとを待つべく爐の火は焚かむ。

ゆふさ霧ふかめるときを
ひととゐて、
燃ゆる爐の火をなつかしみけり。

部屋しきる壁のまなかに爐のありて、
あかく火は燃ゆ。
霧濕(じ)める夜を。

しとしとと霧しめりゆくこの夜ふけ
階子をのぼる。
あゆみ寒けく。

わが寢ねむ屋根ちかき部屋に火あらなく、
霧のにほひはみちてゐしかも。

乏しくも遠きにすめる家妻と
霧になやめる我と
かなしく。

六

戸毎にも錆びてかかれる柝ありて
濡れしとりみゆ。
霧ふる朝は。

霧こめてかそかなるかも。
家の戸に
柝をならして郵夫は往くも。
霧こもる外のもはさびし。
撃柝の
ひくき響きがたまたまきこゆ。
霧いまだ明けぬ街べを、
荷をいだき
ひとりあゆめればかなし。
異國は。

ひたあかき煉瓦の壁が
霧ぬちにそそり立ちぬ。
ゆくて塞ぎて。

霧薄めば壁あらはれて、
ととのはぬ郊外のさま
うたたかなしき。

七

青白き霧かかる空ゆ
とこしへのすがしきひかり
充ちくだる朝。

あが駛せて
ひろき丘のもにのぼりゆきぬ。
霧にうするる赤き陽みると。

霧のなか
あらはに生るる赤き陽の
したしみふかくたけゆく朝を。

ひたあかく陽のかたち浮き、
霧ぬちに圓らかにみゆ。
動ぎもなしに。

丘のうへ
しろくひかれる薄霧に我がひたりゐぬ。
赤き陽みると。

ややつめたく我がかたおもに霧ながれ
眞陽のぬくみをおぼえくる朝。

とほじろく霧はおほへり。
煤じめる煉瓦の街の續けるがうへ。

まさぐろき霧にひたりて
街にもだすひとのかなしきいのち
眼にみゆ。

冬木たつ丘のたかきに
我れはゐて
霧にしらめるひろはらをみる。

霧はれし丘のうへなる果樹園の
つちくろぐろとひかりたり見ゆ。

しろぬりの墻くきやかに
果樹園を遠らしたりぬ。
霧はれし丘。

霧はれし丘べをゆきて
ましろなる山羊の子をみる。
うつくしきくにに。

（大正六年十二月――七年六月）

霞日

定價　金貳圓八拾錢

版權所有

大正十一年五月五日印刷
大正十一年五月十日發行

著作者　石原純

合資會社アルス代表者
發行者　北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五番地

發行者　鈴木泉藏
東京市京橋區銀座尾張町新地五番地

印刷者　出雲寶太郎
東京市神田區小川町一ノ三
一番館印刷所

製本　小川

發行所　東京市京橋區銀座尾張町　合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

北原白秋著　歌集　雀の卵　定價　參圓八拾錢　書留送料貳拾七錢

北原白秋著　歌集　雲母集　定價　貳圓參拾錢　書留送料　拾七錢

與謝野晶子著　歌集　太陽と薔薇　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾五錢

北原白秋著　歌話　洗心雜話　定價　壹圓八拾錢　書留送料　拾五錢

古泉千樫編　子規歌論集　竹里歌話　定價　貳圓八拾錢　書留送料　拾八錢

北原白秋著 白秋詩集 第一卷 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋詩集 第二卷 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 白秋小唄集 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

北原白秋著 民謠集 日本の笛 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著 抒情小詩 わすれなぐさ 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

厨川白村註譯 英詩選釋 定價 貳圓八拾錢 書留送料 拾七錢

三木露風著 抒情小詩 生と戀 定價 壹圓八拾錢 書留送料 拾參錢

日夏耿之介著 詩集 黑衣聖母 定價 貳圓五拾錢 書留送料 拾七錢

室生犀星著 室生犀星詩選 定價 貳圓貳拾錢 書留送料 拾七錢

萩原朔太郎著 詩集 月に吠える 定價 貳圓五拾錢 書留送料 拾七錢

北原白秋著　白秋小品　定價　貳圓　書留送料　拾五錢

山本鼎著　美術家の欠伸　定價　貳圓　書留送料　拾七錢

若山牧水著　靜かなる旅を行きつつ　定價　貳圓五拾錢　書留送料　拾七錢

中原悌次郎著　彫刻の生命　定價　參圓五拾錢　書留送料　拾七錢

三宅克己著　歐洲寫眞の旅　定價　四圓五拾錢　書留送料　貳拾七錢

ペーパー